

# 神代類の実験台

ふえり

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

神代類、草薙寧々、水上博は小さい頃からの幼なじみである。水上博は神代類の機械ができたら実験台にいつの間にかなっていた！爆発したり、空を飛んだり、顔面に5キロの水を被ったりなどしているが彼の明日は存在することはできるのか!?!毎日毎日が命懸け！

そんなハチャメチャsssストーリー

メインストーリーのワンダーランズ×ショウタイムのお話始めました！

## 目次

人物紹介	1
神代類の実験	
上空から見た学校。	5
海はとても綺麗”だった”	8
いざ！山登りっ！！	14
白い謎の箱	19
神代類 v s 水上博	23
じゃんけん機	26
真夏の遊園地	30
風邪を引いた男	34
食べ放題！やりたい放題！！	38
ワンダーランズ×ショウタイム	
なんで隠れちゃったんだろう	41
ロボットと実験台	45
劇団名を決めよう！	53
神代類  暴走する	59
ワンダーランドのセカイ	65
明日の為に…	70
自分がやってきた事を信じて	76

## 人物紹介

この小説の人物紹介。  
新しいキャラが増えるかもしれない。(プロセカのキャラが)

水上博 (ミズカミハク)

身長 160 cm

体重 45 kg

誕生日 5月24日

みんなの呼び方

司? 天馬くん

えむ? 鳳さん

寧々? 寧々さん

類? 神代くん

寧々さん以外なんで名前呼びしないのー?

理由は特にない。

人物↓神代君と小学生の時から幼なじみ。常に一人だった博は神代君に話しかけられ仲良くなった。(寧々ちゃんともその時仲良くなった)

類君がショーに対しての憧れを聞いた後、彼は応援したが、り神代君の何かを手伝いをしたと思うようになる。

その結果、「空中に浮いたり」「爆発したり」危ないことに巻き込まれるようになってしまった。でも、これが神代君の役に立つならと思いつけている。

本人いわく、もう慣れてしまったとか言っているが全然慣れてはい

ない。

・ワンダシヨの実験台

容姿↓黒髪で水色のパーカーとグレーのジーパンを履いている。センスがない。

身長は160cmと寧々より少しデカイ。顔は幼く、良く年上のお姉さんとか同級生とかに「可愛い」などと言われる。髪の毛はとにかく長い。眉毛まで前髪はかかっており、耳元も髪の毛がかかっている。後ろもながい。

好きな食べ物は特にないけど最近美味しいと思っている食べ物は野菜にドレッシングをかけた物。これに対しての類も苦笑い。

類は野菜全般ダメらしく、博はファミレスに行った時に類に無理やり食わせたと言う。成功したり失敗したりなど。

シヨに関しては知識0：：ダンスもちよつと下手くそ。ワンダシヨの中でも下の下。歌は音痴とは言わないが駄目

練習の時は演技面では『司 たまに類』ダンスは『えむ』歌は『寧々(ネネロボ)』の感じでそれぞれ教えてもらっている。

博の練習の一連の流れ

類の実験台？えむのダンス指導？ 寧々の歌指導？ 司の演技指導 の繰り返し

精神力はずば抜けて強い（実験のおかげとも言える？）

神代類↓博の実験台の黒幕。シヨーに対する事の実験も大切にしているが最近博の絶叫を楽しみにしている。危ない趣味をもつ。

自分の実験は危険だだからやりたくないと言われ、やる気を失くすが博が類のシヨーに対しての熱い思いに気付き実験台を引き受けてくれた事が今でも非常に嬉しいらしく。今では親友で一番信用している。

博が野菜好きになった事について。類は野菜が嫌いで、それを聞いたら類は顔をたまに青ざめる事がある。一緒にファミレスに行った時も、類は博にこっそり野菜を移すが、ばれてしまい無理やり口に突っ込まれたトラウマが出来上がってしまった思い出がある。

・ワンダシヨの演出家、出演者

草薙寧々↓博とはあんまり話さないと思っていたが博が自分から話しかけた。理由は類の飛んでもない実験台になってしまったことに気づいてしまったので博が寧々に相談するようになり、

頭を撫でてあげたり相談することによって博は落ち着く事が分かった寧々はお姉さん気分になった。

学校に来たら何故か類が青ざめた顔になっており、その理由を博に聞くと、「神代君が野菜食わずに僕のお皿に移してきたから無理やり食べさせた」って聞いたら思わず寧々ちゃんはグツ!!と親指を立てた。

・ワンダシヨの歌姫

類と同じく最近博の絶叫が好きになりつつある。最近の悩みは博が甘えて来ないことらしい。

実は博に恋心を寄せている。

天馬司↓我らが座長、司くん。博と同じ歳の同じ学年だけど身長があまりにも差が激しいため1つ年下…。それ以下だと思っていた。博曰く、ダンスも歌も演技もダメダメだと言ったが司くん的にはそんな風には見えず練習する度に成長を感じているという。

ストーリーが進む事に解禁

鳳えむ↓我らがわんだほー!!!!!!のえむさん。  
ワンダーステージに来たら必ず博に飛びつき挨拶をする。えむ的  
に博の事を弟のように親しんでいる。(実際には博の方が年上身長  
が……)

## 神代類の実験

上空から見た学校。

僕と神代君は昔からの友達です。彼とは一緒にファミレスでご飯を食べたり。

僕には全然理解ができない機械系のお話をされたり。

今度のショーで、神代君特性手作りの機械を使った皆が喜びそうな事を考えて僕を実験台になつてはくれないかと、眩しい目で見られたのでしたかなくやってみたら。

現在進行形で「空」飛んでいます。

うん。なんか慣れちゃったよ。何回もやってればね、慣れるんだけどさ、やっぱり怖いんだよ。

これで怖くないと言った奴。

お前の家の冷蔵庫の中に入って待機してやつからな、覚えてろよ。

「ははっ！素晴らしいね!!水上くんっ！」

「なーにがっ!!今この状況で素晴らしいね!だよ!!バカ神代君!!一歩間違つたら死んでるからね?まあもう一歩以上進んでるんだけどさっ!!」

胸当たりのトランシーバーを取り、神代君に怒鳴る。因みにこのトランシーバーも神代君特性手作りだ。

性能も良いし結構距離、離れているのに凄く綺麗に声が聞こえるんだ。

彼の才能は羨ましいね

.....

やかましいわっ!!!

うん!確かに凄く!!凄くだけだよ!さっき聞こえちゃったんだよね。

寧々さんとの会話.....



「類……。それトランシーバー？」

「ああそうだよ、これがあれば水上クンの身に何かがあれば助ける事ができる。」

『神代君……。そこまで考えてくれていたなんて……。もう少し彼について考え直してー。』

「それに、これがあれば水上君の絶叫が沢山聞こえるからねっ!!」

『……………今すぐこの場から居なくなろう』

結☆局☆捕☆ま☆つ☆た☆

「神代君っ!!これいつまで飛んでれば良いのさ!!もう降りたいんだけどっ!!」

もう流石に怖くなってきた。早く無事に脱出したいし地面に着きたい…………。

「……。そうなのかい?もう1時……。いや何でもない、もう少し飛んで欲しかったんだけどしょうがない今日はここまでにしよう。終わりたいなら右側を見てくれると嬉しいな、そこに緊急脱出ボタンがあるから」

「えっ?今、君!恐ろしいこと言いかけ無かった!?一時間って言おうとしたよね!!!ねえ!神代クー!。ブチ」

あの野郎。切りやがった。

えー、皆さん。僕とはもうお別れです、少しだけ皆さんとお話をできて光栄に思います。

僕は高2でこの世を去りますが皆さんはまだまだ人生は長い。是非必死に強く生きてください。それでは。

僕は緊急脱出ボタンを押したー。

後から聞いたんだけど僕が緊急脱出ボタンを押した後、花火が僕の周りに出て、グルグル回っていたらしい。30回ほど。

それが終わった後、僕は急降下。頭から落ちていたが流石の神代君といったところか、しっかり対策をしており僕は助かったとき。

めでたしめでたし。

「何にもめでたくないからっ!!!」

「水上くん……絶叫良かったよ」

「お前っ!!まさかその目的で……」

「博……絶叫良かった」

「寧々さんまで……」

f i n

海はとても綺麗”だった”

海。それは…深いことは知らないけど地球上の中で海は地表の70.8%を占めている。

あと飲むとしよっぱい。塩が入ってる。海水だからねしようがないねハツハ！

夏になると誰もが行きたくなくなり、泳ぎたくなる。僕もその中の一人だ。

皆さんは予想がついていると思いますが、僕達は海に來ていますそう。僕”たち”です。

メンバーは神代君。寧々さんですね、お馴染みね。

神代君は、神代類特性ドローンを操作しながら海をカメラで見ている、寧々さんはパラソルの下でゆっくりしてて。

僕は…いつでも神代君の恐怖の実験が来ても良いように…砂浜で…蟹と戯れています。

頼むから神代君はそのまま海をずーっとドローンで眺めて居てくれ。

流石に空飛んだ後に海で何かするのは嫌だって。平和に生きたいんだ…僕は。

…今、思ったけど僕って神代君の実験台になってから長い月日が立つけど。

いつになったこの恐怖に慣れるのでしょうか。

……いや慣れては……いる。

……でも怖いし……辛い。

……でも地味に楽しいんだよな？

……やり終わった後は達成感凄いいけどやる前はな。

だああああああ!!悩んでもしょうがない!!!イメージしよう!イメージ!!

……逆に考えるんだ……辛いと思うから駄目なんだ。楽しいと思えば恐怖感がなくなるかもしれない!!!

イメージ

『神代君っ!!今日の実験は一体どんなヤツなんだい!?もう楽しみ過ぎて、心も身体もウキウキしちゃってるよ!!!』

『今日はノリノリじゃないか!!君はこんな時にも僕の実験に付き合ってくれるんだね!水上クンっ!じゃあ今回の実験何だけど……君に海に入ってもらって……サメと競争をしてみらおうかな?』

「うわああああああ!!!楽しいイメージを考えたら考えたで気持ち悪いし?!なんだっ!!サメと競争って!!殺す気かっ!!」

駄目だ……気分が悪くなった。寧々さんの所に行って、パラソルの下で休もう。

「……博。体調悪いの?」

「わあっ！ビックリしたっ!!」

僕が立ち上がり後ろを向いたら目の前に寧々さんが急に現れたからビックリしたっ!!

「ご…ごめん。ビックリさせようとした訳じゃなくて…」

「べ…別に大丈夫。んで、どうしたの？さっきまで寧々さんパラソルの下で休んでなかった？」

「…博が目の前で変な事やってたから心配になった」

「…変な事とは？」

「一人でブーツとしてると思ったら急に髪の毛ぐしゃぐしゃにし始めて、地面を強く拳で叩いてたから…体調悪いのかなって…」

ええ…僕。そんな事してたの…？え？滅茶苦茶恥ずかしい所、見られたかもしれない。

「いや、全然大丈夫だから、さっきまで死にそうなくらい悩んだけど変なイメージした事によって何か吹っ切れたから大丈夫。」

「…それ大丈夫なの？」

うん！全然大丈夫ではないね!!!

「とりあえず僕はジュース買うために屋台行くんだけど…寧々さんは何か欲しいものとかある？買ってくるよ。」

「私は・大丈夫。それより、体調悪そうだから休んだ方がいいよ。代わりに買ってくる」

「あー。本当？じゃあお言葉に甘えて買ってもらうかな。」

そう言つて、寧々さんに財布を渡そうとしたけど自分のお金で買うから大丈夫と微笑みながら言いそのまま屋台へと向かつて行った。

それから10分後。

流れるように僕は神代君に呼びだされ絶賛、海の中にいます。

今回の実験は何か馬鹿デカイ浮き輪をつけていて海にプカプカ浮いています。

「んでどうするのさ、このボタン押せば良いの？」

「ああ。そのボタンを押せば始まるよ。」

さて、どうしたものか。神代君からは好きなタイミングで押ししても良いよ。と言われてるが僕の命に関わるかもしれない。

ポチ

ドツカアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!!!!!

「浮き輪が爆発したあああああああつっつっつ  
!?!?!?!」

えっ!?!予想外な事が起きたんだけど!?てつきりそのまま凄いスピードで海を渡ると思ったんだけど…今…空飛んでね?

ぴしゅゆゆゆゆゆゆんんん!!!

「後ろの正体は炭酸が入ったペットボトルだったんかいっ?!? えっ! こんな飛ぶものなの!? テレビで見た事あるけどこんな飛ぶものなのこれっ!!」

「水上クン!! 良く飛んでいるね!! これならショーにも使えそうだった!!」

えっ? これショーに使うの? えっ? 死んじやうよ?

それより僕が先に死んじやうけどねアハハハ。

そして炭酸がきれてそのまま15mの高さから落下。15mから海に落ちたらどうなるか知ってますか? 例え水の上でもコンクリートのように固くなると。

つまり|| 死

とも行かず。そのまま自動にパラシュートが開き、神代君と寧々さんの真ん前で着地。そのあと腰が抜けたのかそのまま膝から崩れ落ちた。

「... 博。お疲れ様。これジュース」

「あ... あり、ありがと!! 寧々さん...」

「フム... 改良が必要か... あんなスピードが出てしまったら。客に迷惑がかかってしまうかもしれない。すまない、水上君。危ない目に会わせてしまった。」

「いや…：ちゃんと改良してくれるだけでも助かるよ…：…」

そうして気づいたら僕は疲れて眠っていたらしい。

…：寧々さんの膝で。

「…：えっ寧々さんっ!？」

「…：まだ寝た方がいい」

「か…：神代君っ…：これはいつたい」

「寧々がやりたくてやっている事だよ。素直に受け入れたら良いんじゃないかな？」

と神代君に言われたので素直に受け入れる事にした。

Fin



いぎー！山登りっ！！

山、それは何か… ええっと… すごい虫がいて… すごいっぱい木があつて… 更には草があるんですよ… はい。(語彙力)

そんな所に僕、水上博と神代類、草薙寧々は来ていた。海に行つた一週間後に神代君から『山へ行こうじゃないかっ！』と連絡が来たわけなんで今現在いるわけです。

… いやもう流石に疲れた。聞いてくださいよ。もうかれこれ10分も山登つてるんですよ。

??? えっ? たつたの10分しかたつてないのにもうへトへトなのかよお前だつて?

ぼまえ… ぶちぶちに引き裂いてやろうかっ!? こちとら空を飛んだり、海に来たのはいいけどそこでも空を飛ぶヤツがいるかっ!! そのせいで全身筋肉痛だわ!! 辛いよ泣きたいよ!! でも誘われたら行くしかないじゃん。

しかも暑いし… まあ夏だし当たり前だよねハツハ。

夏は暑くて死ぬ… 早く冬になんないかなーとか言つて実際、冬になつたら寒い早く夏になってくれー。という∞ループが僕にはあるんですよ。人間誰しもそんな事、思つたことないですか?。

え… ? 僕だけ… ?

それにしてもさー！喉が乾いてしょうがないんだよこれが。おかしい、さつきお茶飲んだばっかりなのに喉の乾きが半端ない。

鞆から普通の大きい水筒より少しデカイ水筒を取り出し喉を潤す、気づいたらもう中身が失くなつていた。

… うつそだろおい。もう失くなつちやつたのかよ… まだ山上げるはずなのに中々の序盤で全部飲みきつたじゃん… ヤバすぎんだろ。

はあ… とため息をつきながら鞆のチャックを開き、水筒を閉まつていく。

こうなったら神代君の水筒の中身を貰うしかない。こんな暑い中、飲むのがなかったら死んでしまう。

「神代クーーーーー。ん？」

神代君にいつでも飲めるように許可を得ようとしたら何やら横から可愛いらしい水筒が僕の目の前に出てきた。

視線を横にずらすと寧々さんがどうやら僕に向かって水筒を差し出して来ていたようだ。

「……寧々さんがくれるの？」

「うん」

これは嬉しい。早速頂こう。

……しかし僕のより水筒が小さいし、それに寧々さんは女性だ。ここは嬉しいけど遠慮をしよう。なにかがあつて、飲み物が大切な時にはなかったら大変だし。断ろう。

「あー、ありがと寧々さん。でも遠慮しとくよ。それは寧々さんの水筒だし、申し訳ないですし。」

寧々さんに向けて水筒を差し出す。

「……私は今、喉が乾いてない。博が飲んでもいいんだよ？」

ググツと”何故か”力強く押し返された。

「いやいや……僕も自分のを飲んだばかりだし……今は大丈夫か……」

「飲・ん・で……？」

……え？怖いよ？めちやくちや”圧”が掛かってくるんだけど……僕の中で危険察知気が強く反応してしまっている……!!!

『飲まなければ恐ろしい事が起きるっ……!!』

「じ……じゃあ……頂きます」

「うん！」

あ、寧々さんからの謎の圧が消えた……。

パカツ……と水筒を開ける。そのまま飲もうとしたら僕にある疑問が生まれた。

あれ……？このまま口をつけて飲んでしまってもいいんだろうか……もし仮に口をつけて飲んでしまったら変な菌が付いてしまわないだ

ろうか。病気にかからせたら困ってしまう…。

人間の口のか菌がめちやくちやいるって言うしな…。

あつ！そうだつ！！

僕は水筒を上に向け、口との距離を放す。上からお茶が垂れてきて  
上手く口からこぼれないように飲んでいく。

流石に全部は飲んではいけないのでほんの少し飲んで、水筒を閉じ  
寧々さんに返す。

「ありがとう寧々さん。助かったよ」

「……」

えっ？何か怒ってる…？何か僕もしかしてやらかした？思った  
以上に飲み過ぎた…？

少し怖くなった僕は神代君に近づき寧々さんが何故か怒ってし  
まった事を伝える。

「ねえ… 神代君、寧々さんもしかして… 怒ってたり… する？」

「水上クン…。あれは寧々が可哀想だ… あそこで男らしく行けば  
良かったものを…」

ハア… と頭を押さえながら僕に言ってくる。

「…？どゆこと？男らしくって何…？そう言う場面あった…  
？」

「僕は君が鈍感すぎて驚いているよ」

寧々さんの所を見ると、少し凹んだ顔をしながら僕の所を見てく  
る…。

え…？ホントに何があつてこうなったのかマジで分からん。助  
けて…。

するとズカズカと僕の目の前まで寧々さんがやって来た。

「… バカ」

「ええっ?!?!」

急にバカと言われてしまった。

そして僕は山を登りきるまで何故あそこで寧々さんが不機嫌に  
なってしまったのかをずーっと考えていたが結果はなんにも変わら

ず。『お茶を飲み過ぎた』しか思い付かない。

寧々さんは喋りかけても返事はないし。神代君に至っては寧々さんが不機嫌になった理由は分かっているくせに笑ってるだけ。

覚えておけよ神代君……野菜増し増しを君の口の中にめいっばい突っ込んでやるからな……。

……解散の時間になりそれぞれの家に帰り、僕はまだ理由を考えていたが全く答えが分からず。

寧々さんはまだ不機嫌のままだ。

更に、今、寧々さんから「バカ」「バカ」「バカ」と10件連絡が来ていた。

「いや……マジで何で怒ってしまったのか検討もつかないんだけど……」

ピロン

どうやら神代君からも連絡が来たようだ。

『水上クンっ！ちよつと空を飛んでみたり、爆発してみたりしないかい（＾＾）』

そして僕は静かにスマホを閉じた。

僕の人生の終わりはどうやら近いらしい。と僕は思いながら夕暮れの街中を歩いていくのであった。

f i n

## ある会話

「……博は鈍感すぎる……。私、勇気だして頑張ったのに」

「しようがないさ……。水上クンは、鈍感の領域を越えてるんだからさ」

「……」

「寧々……大丈夫だよ。僕がしっかりサポートするし、心配することはない。」

「類が… サポートするにしても… あの鈍感さじゃ… 成功するか分  
からない…」

「… そう焦ってやることないし、ゆっくりやっていけばきつと上手  
くいくさ」

「… うん。そうだと良いな。」

## 白い謎の箱

『朝 神山高校』

「水上クン、ちよつとだけ良いかな？」

「?どつたの神代君、こんな朝早くから」

「君にプレゼントしたい物があつてね」

「え…… 何これ、いかにも怪しくて絶対に貰いたくない物は……」  
「今言つてしまったら面白くないだろ?家に帰つたら開けて見てくれ」

という感じで今持っている謎の白い箱を解き明かそうと言う訳です……。

めちやくちや開けたくないんですよ。皆さん分かりますかね……?  
朝、急に来て「プレゼントだ」と言われてどう思います?!

嬉しい人は嬉しいんでしょうけど…… あの神代君ですよ?あの実験大好きマンですよ……?怖いって……。

…… とりあえず開けなきや中身分かんないし。あと、あんまり人を疑つてはいけないうて言うし…… それにだいぶ仲良くさせてもらつてるし…… ここは素直に受け取つておく…… べき…… か。

シユルリとまず赤いリボンを外し、パカツと箱を開けると、なにやらとても大切に保管がされていて、衝撃吸収のプチプチが大量に入つていた。

…… どーせ神代君の事だから開けた瞬間にドツカーンだと思つたけど…… 今回は違うのか?

大量のプチプチの袋を退かしていくと中央に水色の機械物があり僕はそれを取り出した。

手に取つたものは手のひらに収まるぐらい、少しずつ小さくて何か軽く引つ張つたら爆発しそうなヤツもついている。

「これ引つ張つたらなんかおこるかな...?」  
自分でも馬鹿なことやったかもしれないと思うさも知れないが...ごめんなさい僕もそう思います。

そして僕は指を引つ搔けてピンつと取った。

.....

.....

.....

「ん?なんにもー」

ビビビビビビビビビビビビビビビビ!!!

「うわああああ!!!」

急にめちやくちやデカイ音がなり響きだした。ビツクリしてしまつた僕は咄嗟に両手で耳を封じ手しまい、謎の爆音でなるものを部屋の隅に投げつけてしまつた。

「...っ!なにこれ...めちやくちやうる...さいっ!!」

.....ガチでうるさい!急いで止めないと...鼓膜がっ...!でもうるさすぎて怯んでしまう..。

.....よしとりあえず届いたぞ...!外した所をもう一回、はめなおせば...止まるはずっ!!

てか止まってくれなきや困るっ!!!

カチ.....よし。とまつた...!なんとかやりきれたぞ。ほんの数分なはずなのに長時間たつた気がするよ...。

そして僕は機械を箱の中に封印し、二度と開けないためにテープでグルグル巻きにしたあと鞆にしまう。

鞆にしまつたあとなにやらスマホから連絡がきていたみたいだ。それを確認すると、どうやら神代君なようだ。

『ハツハ☆水上クンっ!気に入ってくれたかい?』

「...あのさ?これ何?めちやくちやうるさかつたんだけど、うるさくて鼓膜無くなると思つたよねうん!!」

『ごめんごめん、それは防犯ブザーであってね？水上くん、最近夜の外出が多くなつたからって聞いたから僕の特長、防犯ブザーを作つた訳だけ』

「おうん。あ、ありがと……。お礼言つちやつたよっ!?さつきまで僕、怒つてたのに今の聞いてなんか素直に感謝しちやつたよっ!」

『音の調子とかは大丈夫だったかい?いつ、どこで、何があつてもそれを使えば1000m以上までは聞こえるから』

「……。うん。それ聞いて良く僕の耳、壊れなかつたなって思ったよ。まあ……。神代君が僕のためにそこまで考えてくれていて、時間を費やしてまで作ってくれたんだから大事に使わせてもらおうよ」

僕はそう言いながらさつき巻いたばかりのテープを剥いでいく。

ああ……。巻きすぎたな……。面倒くさい事したかもしれない。

『類……。?音声と博の写真とれた?』

『ああバツチリだよ寧々、それにしても水上くんも良いリアクションをするよね』

『うん。今日も元気で何より、その音声とビックリした時の写真は欲しいから後で送つておいて……。』

……。え?この人たち何しとんの?写真?音声?何を言っているか

僕には理解ができません。

焦りながらテープを急いで雑に開け箱を見てみると……。小さなカメラとマイクが貼り付けられていた。

「神代君っ……!!!」

『っ!類っ!!電話切り忘れてる!!』

「わあっ!!寧々さん!?その写真と音声をいつたいどーすーブチ……。完全にはやられた気がする。あんな恥ずかしいヤツ見られ

たら……。イキテイケナイ

ハア……。と今までより異常の深いため息をついた。

まあ……。いいやいつもの事だし……。慣れたからいいやーで済ましたら本当は駄目なんだけど、実験よりはましか……。そんな事思っている時点で、僕ってかなり重症なんだなって思い知らされました。



神代君&寧々さんペア

今回の実験目的

神代君「小さな小型カメラを使って画質をどこまで綺麗に撮れるか。音声は空中でのショーの時に性能を高めにするため。」

寧々さん「博の驚いた顔とビックリした音声が欲しかっただけ」

## 神代類 V S 水上博

「ここであつ！水上くん！今回、実験で使いたいのがー…。」

現在、僕と神代君はファミレスに来ています。そこで今回の実験について神代君が説明をしているところで僕はメロンソーダを流し飲んでいた。

「えっ… それって大丈夫？」

「大丈夫大丈夫!!安全安心の神代類の保証がついているからね!!」

「不安すぎるわっ!!」

… まったく今回もハチャメチャな実験をするもんだな… 良く思い付くものだ。

「で!どうなんだい!!実験引き受けてくれるかいっ?」

「あ、うん。別に大丈夫だけどさ神代君」

「じゃあ近くの公園で、さっそく試したいことがあるから行こうか」

「ねえなんで話そらすの神代君、その前にやるのが残されているよね?」

僕が清々しいほどの笑顔で僕の目の前にある、お皿に指を指す。

「… 何のことかな?」

「これ… 神代君が僕のお皿にうつしたサラダだよね…?」

お互いに僕たちは睨み付けている。

「水上くんは… そのサラダを僕にどうさせたいのかな…?」

キリッと真剣な眼差しで僕を見てくる。いかにもそれは、水上博が残したサラダと言いたいのだろう。

「無理やり君の口に突っ込むと言ったら?」

「… 残念だけど全力で抵抗させてもらうよ」

… クソ! いったいどうしたら良いんだ!! さつき勢いで無理やり突っ込むとか言っちゃったけど… ケガしたら危ないし、ここはじゃんけんか?

じゃんけんなのかつ…!?

でも、ここ最近の勝率が圧倒的に低すぎる… 何せクラスのじゃんけん大会で、全敗し最下位という結末で終わってしまった。

クツ… やはり諦めるしかないのか。でも食べさせないと神代君の野菜嫌いがいつまでたつても治らないじゃないか!!

「そして僕は箸を置き… 諦めた。」

「…………… もう無駄な争いは止めよう。お互いが傷つくだけだ。」

「…………… 神代君、僕が悪かった。もしも君に食べさせることが成功しても、体調が悪くなつてしまったら大変だしね… 僕が大人しく頂くとするよ」

「… そうしてもらうとありがたい。本当に感謝しかないよ… 水上クン」

「じゃあこれ食べたら公園にはやく行こうか!」

「そうだね! 水上クン」

「全く… 神代君の野菜嫌いもほどほどにしてよね… じゃあ頂きまーすー、と見せかけて!」

素早い速さで神代君の口元へ運ぶ!!

…………… キンっ!!

「何っ!?!」

箸が… 弾き飛ばされたっ!?

「… 流石に今のは驚いたけど、一步届かなかったね… 水上クン?」

…………… やられた。完璧な不意打ちだったんだけど… 上手くフォローで弾き飛ばされたか。

「分かりましたよ!! 食べれば良いんでしょ!! いただきまーす!」

もうヤケクソだ。ドレッシングをかけて口の中へと流し込む。

なんでこんなな美味しいのに食べないかな…。

「ありがとね水上クン」

「… お礼を言われるのは嬉しいんだけど、めちやくちや僕の顔見るじゃん、もしかして何かついてる?」

「うん、特に」

「ふーん」

分かってたんだけど神代君、ここまで野菜嫌いだったっけ? なんか1年立つごと日に日に強くなっているような気がするよ。

よし…聞いてみるか。

「…ピーマン」

「？」

「ピーマンは食べられる？」

「ああ…なるほど。無理だね」

「何で？」

「食べた瞬間にあの苦味が口に広がるし駄目だね」

まあ確かに、ピーマンは苦味な人もいるだろうししようがないね…。

次、

「トマト」

「トマトかい？上手く表せられないけど簡単に言うとかか嫌だね」  
……………。

「…セロリ」

「それは僕には駄目だよ水上くん…持っただけでも独特な匂いがするし、あとあれを食べる人はどんな気持ちで食べているんだろうね？」

「農家さんに謝れつ!!!」

えつなにつ!?この神代類って人、めちゃくちゃ野菜に愚痴言うじゃない!?

えつ…怖…野菜に親でも殺されたのか？

「あ、後ねー」

「ああっ!!もう良いよ！分かったっ！よく分かったから！神代君がどんだけ野菜が嫌いなのかよく分かりましたっ！よし実験に行こう！実験！あー楽しみだなー」

あんな事、全国の農家さんが聞いてしまったら精神が崩壊してしまうかもしれない(多分)。

もう聞いてて分かるもん、何か知らないけど辛かったもん…心がっ…!!

そうして僕は神代君を無理やり公園に連れていき実験台にされるのであった。

## じゃんけん機

夜中、一人の男子高校生が自宅の自分の部屋で騒いでいた。それは、哀れな姿でいたので―あった―。

「じゃんけんポン!!」

ブス…痛ったあ!!目がアアアああ!!

なんだなんだよ!この機械っ!じゃんけんに負けたら目潰しされるってなに?ギャグ漫画か!

今、僕がやっている事は神代君に頼んで作ってもらった『じゃんけん機』で修行をしているのであった。

何故、僕がこんなことをやっているのか説明をしよう!

前にねクラスの行事でじゃんけん大会がありましたね、その時は自信満々だった訳だけですよ。

そこまで僕もじゃんけんは弱くないし。流石に上位は余裕でしょ?…と。

ま、悪くても1〜5人ぐらい負けてもしょうがないかなーって余裕ぶっこいてたら。

”全敗”

…うん。全敗

もう、笑っちゃうよね。あんなだけの自信満々に挑んでおいて負けるって。

しかも全敗って何なん?

まあ僕もこれらの経験でじゃんけんがどのくらい弱いか良く分かった。そこで僕は神代君のクラスに乗り込み、この機械を作ってもらった訳ですが。

機械にも負ける。それが僕ですどうも。

しかし…このままではいけない。僕がじゃんけん最弱王では終われない。だってじゃんけんはこれからも絶対に使うはずだ…。

例えば、社会人になってから居酒屋とかに行つたとする。そこで誰かが奢るかじゃんけんが強制イベントが発生する訳だ。

そう、僕はじゃんけん最弱王。自分でも言うのはあれだけど必ず負けて奢るという最悪の結末に至る事は分かる。

そこでまだ悪いイベントは続く。！僕がじゃんけんが弱い事に気づいた社長やら先輩やら同期やらにやたら、じゃんけん勝負に持ち込まれるに違いない。！

そして金が失くなり。：。貧しい生活に。：。

何と言う理不尽!!!

そんな不幸な結末にさせないために僕はこの『じゃんけん機』で頑張っている！

が！しかし何度も言っているが機械にも勝てないんですよ。しかも負けたら負けたらで目潰しくらうし。

もう目が痛い。どのくらい目潰しを食らえば良いのだろうか、もう100回以上うけちやつてるからね？

めちやくちや目が痛いよ？

想像以上にこれ痛いからね？皆も一緒に受けて見る？飛ぶぞ。

それにしても。：。周りが光って見えるのは気のせいだろうか？

まああんだだけ目潰し食らつておいて逆に無傷だったら凄いや。そんな人に会つて見たいくらいだわ！

神代君めえ。：。自分自身で頼んでおいて文句言うのは流石にヤバいかも知れないけど、これだけは言わせて欲しい。

絶対に目潰しの機能いらなかつたよね？

この機能がなければ楽にじゃんけん練習ができたと言うのに。：。

。：。もう良いよ。やってやるよ!!勝つまでやってやるよ！目が見えなくなるほどやって攻略法を見つけてやって、神代君に勝負を仕掛けてジューズを奢らせてやる。!!

考えれば考えるほどイラついてきたので僕は謎のスイッチが入ってしまったのである。

今思うと、この時の僕はどうかしていたかも知れない。

## 次の日

『学校／＼2ーB』

ふっふっふ… 待ちに待ったぜ…！この日になっ！

「神代君!!勝負だ!」

「いきなり呼び出されたと思ったら勝負かい?」

あれから時間がたち翌日。僕は学校にすぐ行った後、神代君のクラスを訪ねて勝負を挑んだ。

「そ、勝負!神代君の機械で昨日の夜、めちやくちや頑張ったからその成果を見せたくて」

「なるほど、いいよ。それじゃあさっそくやろうか。」

「じゃんけんー」

負けた。

一発で勝負がついたよ。あの必死に頑張った時間はいつたいなんだったのか。

あの痛いのを必死に耐え、頑張った夜はなんだったのか。

僕はクラスにある机に頭を擦りつけ、軽く頭をガンガンと上下に叩きつけた。

神代君に負けた後、寧々さんにも勝負をしに行き見事に負けて更に凹んでいるのも理由である。

何故か知らないけど寧々さんに『よしよし、博は頑張ったんだね』と撫でられ、後輩に恥ずかしい姿を見せてしまったのが恥ずかしい。

「あーもう駄目だあ」

どうするんだよ……結局最弱王の称号は僕のままじゃねえか!!

マズイ……非常にマズイ事になってしまった。このままではクラスの人どころか神代君と寧々さんのパシリになってしまふ……。

いや……よく考えて見てみる。あの二人だぞ? 何だかんだ言つて僕と一緒にいてくれる、あの二人だ。大丈夫、安心しろ。水上博……いくら僕にじゃんけんにも勝ったところで何かお願い事される訳がないじゃないか……! 僕たちずっと友達だ……!

現実はそのなりに甘くない。

そして僕はじゃんけんにも負けたお掛けで、神代君と寧々さんには鬼畜なお願いをされたのは、また別のお話。



## 真夏の遊園地

「あの一… 寧々さん？」

「……」

「そんなに引つ付かれて歩いてると、恥ずかしいと言うか何と言うか……」  
「離れてほしいだなーんて」

「……」

誰か…… 助けて、寧々さんが…… 寧々さんが……

えっと…… 今日は寧々さんと二人で遊園地に来ています。

僕が暇だったのと、バイトで稼いだお掛けでお金が余裕ができたのでどっかに遊びに行こうと思ったわけですよ。

そこで一人で遊ぶのもあれだし、神代君を誘った訳なんです……  
断られちゃったよ。

これには博くんもビックリ。メール二度見しちゃったからね。まさかの結末ですよ。

「博の中での神代君イメージ」

『遊園地かい!?それはショーのネタが山ほど思い付きそうだね!是非行こう!!今すぐ行こうではないか!』

とでも言って来てくれると思ったんだけどな……。予定でもあったのかな?

まあ神代君がダメでも寧々さんは誘おうと思ってたし、ダメ元でメールを送って見たわけですよ。

30秒くらいかな? 『いいよ』とすぐ返事が返ってきましたよね。

二度目のビックリ。

「博の中での寧々さんのイメージ」

『今日は暑いしそれにやりたいゲームがあるから却下で』

とでも返って来そうだったんだけどな、でもわざわざ僕のために来てくれると思うと感謝しきれませんよね。

とまあ、こんな感じで寧々さんと近くの公園で集合して遊園地で遊

び回っていたのですが。

…… 覚悟はしていた。

分かっていただけがっ…… !!!

もうまさに。

寧々さんが倒れそうだ…… !!

どうしよう困った！もうなんか汗びっしりだし、話しかけてもポーっとしているのか、それともタイムラグがおきてしまっているのか。

とにかく返事が遅い。

くそ…… あと顔も青白くなってきてしまっている…… !!

マジでどうしよう!? 神代君たすけて!!!

こんな暑い中、日陰がないところで歩いている方がバカなんだけど。

お店の中でも行って、涼しいエアコンの中に入って寧々さんを休憩させなければ……。

命がない。

もうフラフラだし、くつついていなきや歩けなそうだし恥ずかしいなんて言っている場合じゃないよね。

とりあえず自動販売機を見つけて、寧々さんに水分補給させないとマジでヤバいつ!! 僕も正直きつけれど、間違いなく一番死にかけてるのが寧々さんだ…… !

そして僕は自動販売機を見つけ、寧々さんをつとりあえず休憩がてら座らせ、鞆から財布を取り出し小銭を見た。

「…… 12円しかねえじゃねえか!!!」

何故だっ!! こう言う時に限って小銭がない大事件が発生してしまっただっ!!

しょうがない、ここは1000円札を使って買うしかない。てか、小銭じゃなくても千円で買えるじゃないか…… ! 何を考えていたんだらう僕はアハハハ。

そして僕はお札が入っていたところを見た。

「…… 万札しか入ってねえええええええ!!」

僕は財布を地面に叩きつけた。

いよいよ、ガチメにヤバくなってきた!!死ぬのか!?死んでしまうのか!?遊園地で熱中症で二人死亡になったら笑えない。

僕は寧々さんのところまで行き手を伸ばした。多分自力で立てそうにもない。

「寧々さん大丈夫?立てる?」

「... うん、何とか...」

良かった... なんとか無事だったようだ。

でも本当に申し訳ないことをしてしまった。本当だったら冷たいジュースを飲めたはずなのに。そしたら少しはましになっていたはず。

「とりあえず急いでお店の中に行こう。そうしなきゃ僕たち、干からびちゃうよ」

「... うん... 後は自分で立てるから大丈夫。ありがとう」

「ん。そう?」

どうやら寧々さんは自分で立てるらしいので助け船はいらないらしい。本当に大丈夫だろうか?

「よいしょっ... ワア!」

「うお... つ!?だ... 大丈夫?」

「... / / /?!?」

全然大丈夫ではなかった。

寧々さんが転びそうだったため、咄嗟に寧々さんを抱きしめてしまった。どうしよう。

... 僕、とんでもないことしている気がするけど、これは事故なので... お巡りさん僕を捕まえないでください。お願いいたします。

「... ごめん。今すぐに離れ...!」

「ちよ... ちよつとまって!!もう少しこのままです...」

「え... はい」

離れようとしたら服を引っ張られ強制送還されてしまった... 凄い恥ずかしい。人にめっちゃくちや見られてるよこれ。あまりの恥ずかしさに僕は体も顔も物凄く暑くなってしまった。

「ネ… 寧々さん… そろそろ大丈夫？ 人に見られて恥ずかしいんだけども…」

「…」

返事がない。

「寧々さん…？」

顔を覗くと顔が真っ赤になっていて気を失っていた。

「嘘でしょー!!？」

そして僕は寧々さんをおんぶをし、お店の中までダッシュ。身体を休めたあと、寧々さんに水を飲ませて、なんとか復活した寧々さんが起きた後、僕たちは遊園地を去っていった。

これらの出来事で水上博は夏が結構嫌いになったらしい。

無事帰れた家での寧々さん

(博に抱きついちゃった… !!暑いせいで気絶しちゃったって言い訳はできたけど… 博に抱きついたせいで気絶しちゃったなんて言えない…っ！)

(…でもあの時間はもうちよつと続いて欲しかったな…)

そう寧々は思うと顔がまた真っ赤になり、枕で顔を伏せて足でブン振り下ろすのであった。

## 風邪を引いた男

「ぶえつくしよんー！」

ある日曜日の日、一人の高校2年生が部屋にあるベッドで死んだようにぶっ倒れていた。

その人物の名は『水上博』。彼は昨日の休みの日、いつも通りに幼なじみである神代類と実験をしていたのである。

実験内容としては、水風船をただ単に僕にぶつけるといふ実験だった。

これだけ聞くとただの虐め現場に見えてしまうかもしれないが、水風船の威力とどれくらいの範囲があるかという実験内容だ。

顔面に直撃したり、体全体がビショビショになってしまうのは予想内だった訳だが、季節は暑い夏を越えて秋。

秋と言っても冬に近づいており、長袖を着るのが多くなってきたこの頃。

そんな季節につめたい水を体に濡らしたらどうなるんでしょうね？

風邪を引くにきまつてるんだろおお!!!

なーにが『大丈夫だよ、神代君！今日は暖かいし、それにお風呂に入れば風邪なんて引かないよ〜』

……全然大丈夫じゃなあああああい!!何の確信があつて大丈夫と言ったんだ…僕はっ…！

そのせいで風邪を引いたんだぞ！責任取れっ!!

そもそも予想内なら、風邪を引くことぐらい予想しろよ！それくらい分かれや!!

「っ…!?!」

ああ…そうだった、僕は風邪を引いているんだった。

昨日の自分に対してツツコミをいれてたら頭に響く…もうおとなしく寝よう。

そして僕は静かに枕に頭を預けて、布団の中に入り、そのまま夢の中へと…

『ピンポーン』

眠りにつけなかった。

…… 宅急便か？家に親は仕事で居ないし… クツソ、僕が行く  
しかないのか……。

重い体を動かし階段を降りて、ドアを開けるとそこには……。

紫に水色のメッシュが入った頭髮の人と、灰色がかかった緑色の髪  
型でいかにも無気力な瞳を持った女の子がいた。

10秒くらい、その人たちを見つめて僕は静に玄関を閉めた。

そのまま、自分の部屋に戻ろうとしたら玄関を物凄い叩かれた。

…… もういいや放置しとこう、寝ればいずれいなくなるだろ

う…… それにしてもさっきの人たち、神代君と寧々さんに似てたん  
だよなー……。

今度、二人に言ってみようかなー…… と考えながら階段を上がつ  
ていくと、電話がかかってきた。

ポケットの中に入っているスマホを取り出し、誰かからかかってき  
たのかを確認すると、寧々さんからだったようだ。

これはナイスタイミング、忘れる前に言うことができるぞ！

「もしもし？寧々さん？」

『博!?何で玄関の扉を閉めたの!?開けて!!』

いきなり大声をだされたせいで、頭が痛かったのがもつと痛くなつ  
てしまった。

「…… ん？どゆこと？だって寧々さんたち学校でしょ？あ、まあい  
いや、それより聞いて欲しいことがあるんだけどさ…… さっき、玄関  
に二人いたの、その二人がさあー、神代君と寧々さんにめちやくちや  
似てたの！凄いよね！」

『それ…… 本物の私たち!!それに今日は日曜日!!今、博の家の玄関で  
類と待ってるの！博が熱を出してるって聞いたからお見舞いに来た  
の!』

「え…… なんか怒ってる？」

なんかいつもより寧々さんが声を張っている気がする……。いった  
い何があった。

そんな事を考えていると、今度は男の人の声が聞こえてきた。

『寧々は怒っていないし、安心して大丈夫だよ水上くん。逆に水上クンの事が心配でしょうg... いてて... 痛いよ。』

『類は余計な事は言わなくて良いからっ... !!はあ... とりあえずドアを開けて... 私たちが看病をしてあげるから』

なんだ... さっきのは、本物の神代君と寧々さんだったのか... あんだけ間近で見てたのに分かんなかったって事は相当、体弱ってるな...。

重い重い身体を動かし、玄関にいる二人を家にいれた。

「水上くん大丈夫かい？顔が真っ青じゃないか、辛そうだし僕が部屋までおぶってあげるよ」

「いや... 風邪を引いたのは、ほぼ神代君のせいと言うか... いや... 僕も実質、自滅なんだけどね...」

「酷いじゃないか... 水上くん...。そこまで言われてしまうと、流石の僕でも涙が出てしまうよ... よよよ。」

「はいはい、お芝居はそこまでにしといてよね... 博、キッチン借りるねスープとかで色々買ってきたから何か作るよ、朝から何も食べないでしょ？」

「うん... ありがとう... 好きに使ってもらっていいよ...。それにしても... 寧々さんの手作りかあ... 楽しみにしてるよ」

「... / /っ!!... うん。頑張って作るから...。楽しみに待ってて...」

少し寧々さんの頬が赤くなっている気がした。

「そういう訳だから類。料理ができればで部屋に向かうから、博の看病よろしくね」

「ああ、分かったよ。さあ水上くん行くよ」

そして僕は神代君におぶられ、自分の部屋に向かうことになった。

「... 水上くんは好きな人や気になる人はいるかい？」

「... え？何いきなり？」

「いや、少し気になってね、そういう人はいないのかい？」

「... 今の所はいないけど... でも、いつかはそういう人を見つけ

たいと思うよ、仮にいたとしても僕に興味を持ってくれそうにもないし。。。」

「そんな事はないと思うよ。水上クンに対して興味を持っている人はいるはずだよ」

「まあそうだと。。。いいね」

「(フフツ。。。寧々。水上クンを振り向かせるのはまだまだ時間がかかりそうだ。)」

神代類は微笑みながらそう思うのであった。



食べ放題！やりたい放題！！

「さあ水上くん召し上がれ！」

ロボットやらロケットの絵が沢山、描かれているエプロンを着ている、神代君が僕の目の前に訳が分からないほどのたこ焼きを置いてきた。

それはもう凄いほどの湯気がでており、椅子に座っている僕が目線からは、神代君の顔しか見えないほどの積み上がっているたこ焼きが嫌ほど見えていた。

僕はこの状況に酷く怯えていた。まさかこんな事になるとは…………。

「神代君………… つ!?僕が悪かった…！まさか全部食べちゃうとは思わなかったんだよ…！あんなに美味しいだなんて思わなかったんだっ！今すぐ同じヤツのラムネ買ってくるから許してっ!?」

「大丈夫だよ水上君！「何が大丈夫なの…？」君は見た目の割には沢山食べるし、なりより僕が君の為に愛情を込めて作った物なんだ…！勿論食べてくれるよね…！水上くん…？食べ物への恨みは怖いんだよ…？」

目が笑ってないんですが神代さん… ちょっと冗談止めてくださいって…洒落になりませんからっ!?無言で熱々のたこ焼き5個一気に食べさせようとさせないでください!!?!?

こうなったら逃げるしかねえ!!

グツ…………!!!

…………あれ??なんか…手が動かないんですが??

手首を見ると、何と言う事でしょう！手錠がさされているではありませんか!!しかも、ご丁寧にカギ付きで。

「あの………… 神代君さん…………。逃げるという選択肢は僕にはありますか…？」

「無いし、存在もしないね。それじゃあスタート☆」

「え!?!ちよっ！スタートつてちよつとま…モゴっ!?!?」

神代君が無理やりぐいぐいとたこ焼きを押し付けてくる。

アツツいつ!?熱いつて!?止めて死にはしないと思うけど舌が火傷しちゃうって!!何で神代君はそんな笑顔で僕の口に黙々と入れてくるんだよ!!

「で、どうなんだい?水上クン、僕の愛情こもったたこ焼きはとっても美味しい... だろ?」

「熱くてとつても食べれないんですけどっ!もう舌が限界に達しているをですけど!?!」

クツ... 食べ物への恨みはこんなにも恐ろしいものだったのか... あのいつも温暖な神代君が暴走してしまっている... (多分、相手が水上博だから)

「そうかいそうかい、熱くて食べられないんだね。それじゃあ水をあげようではないか」

カチャ

「ん...??!は?えっ?はっ?!なんだその馬鹿デカイ、ホースはっつ!?!」

「なんだって... それは水上クンが舌が熱いからって言うから冷やしてあげようと...」

「限度を考えてよ!?!普通に水道水の水で良かったから!?!普通にコップに水を注いで貰いたかったよ!?!って聞いているの?神代クツ」

名前を言いきる前に巨大なホースから大量の水が僕の体、全体に噴射された。

それはもう大量な水を飲んだ。いや、飲んだとは言わないな。『水を被った』だ。

「さあーて、無事に舌も身体もよく冷えた事だし熱々のたこ焼きいってみよう☆」

「あれだけ文句言つといではあれですが... さっきの水のせいでお腹いっぱいになったのでこれ以上食べられません」

「なるほど、少しやりすぎたか...。それじゃあ熱々のたこ焼きは止めて、水上クンが打ち上げ花火になる実験をするべきか...」

いや... 踏みとどまってくれて良かったあ。これ以上食べ続けてたら、トラウマになるところ... だっ... た... よ... ?

「いや、ちよつと待つて？今、神代君何て言った？」

「何か問題でもあったかい？ただ僕は水上クンが打ち上げ花火になるって事しか言つてないよ？」

「問題しかないよ!?何が打ち上げ花火ですか!?死んじやう!!僕死んじやうよ?たかが熱々のたこ焼きを食べたくらいで死にそうなの僕が打ち上げ花火になったら終わりだよ!」

いくら今までの実験を耐えてたからって打ち上げ花火は流石にヤバすぎる…!!

「それじゃあいつも通りの公園に向かおうではないか♪」

「うおおわああ!!はなせえええ!!」

30分後

「……これで無事なのがおかしい」

「流石に僕でも危険な事はやらないさ」

「さっきの実験も十分危ないと思うんですが」

Fin

## ワンダーランズ×ショウタイム なんで隠れちゃったんだろう

今日も今日とて家に帰ろうとしたが隣のクラスから出てきた神代君にばったりと会ってしまった。

神代君からはタイミングが良かったらしく、用事を聞いてみたところ『ワンダーステージ』という場所き来てくれという用だ。

特に用事がなかった僕はOKをだしてしまっただが何かか引つ掛かる、いつもの実験をやるなら公園か僕の家か神代君の自宅のはすだ。

それにしても『ワンダーステージ』とはなんなんだろうか、てかそこってテーマパークにある所じゃん……。

神高から結構離れた場所にあるからめんどくさいな……と考えるが、しぶしぶ自転車を漕ぐのであった。

テーマパークに着き『ワンダーステージ』という場所を探しているが本当にこのルートで大丈夫なだろうか、なんだか人もまばらになってきたし、木がボサボサ生えている場所にたどり着いちやっただすけど……。

神代君……本当にこの地図はあっているのか……？とりあえずこの先に何もなかったら、電話して怒鳴り付けてやろうと思っただに進んでいくと……。

「おっ……なんか見えてきたぞ？」

目の先に見えたのは建物。徐々に進んでいくと道が広くなり。さっきまで木たちが密集していなくなっていた。

前に視線を下ろすとステージがあった。

「……多分、ここが神代君が言っていたワンダーステージ？」

……見た目は凄いボロボロでいまにも崩れそうな建物の見た目してるけど……。

それにしても神代君はいったい何がしたいんだ？こんなところまで呼んでおいて……。

「？」

辺りを見渡すと人影が見えた、咄嗟に僕は身を隠す。

「というわけで、演出家を連れてきたぞ！」

「わあく！昨日のショーの人だ！ようこそわんだほーい☆」

そこにいたのは神代君と…ピンク髪のわんだほーいって言うてる子と…金髪の…あれ？あの人…同じ高校の…誰だっけ？まあいいか

「へえ、こんなステージがあつたなんて知らなかったな、古いけどしっかり手入れされてるね」

ここのステージあるってこと知らなかったんかいっ!!めっちゃめちゃ、俺来たことありますよーみたい感じで、来てくれて言われてたから知ってると思つたのに知らなかったんかい!!!

え？じゃああの地図はどうやってスマホに送つてきたの!!え？こわい…!!こわいよ？恐るべし神代君…。

「君が司くんの言っていた子だね。神代類だよ。よろしく。」

「よろしくねっ!!ねえねえ類くん！昨日のショーの続きはいつやつてくれるの?」

なんだかあの子、凄いパワフルな子だあ…めっちゃめちゃ目が輝いてるし…。

「おや、君も見ていてくれたんだね。いつか必ず、続きをやると約束しよう」

「本当？約束だよ?」

「ああもちろんさ」

「あたし鳳えむ！よろしくね類くん♪」

…鳳って…どこかで聞いたことあるけど…なんだっけ?

「そうだ類くん！あのピューンって飛ぶやつ、あたし達のショーにも使つてみたいな！」

さつきから、ショー、ショーとかいつてるけど…ステージ…にショーの話し…ここでショーをするってことか?多分…。

「…ああ。ドローンだね。もちろんいいよ」

「ほんとに?!じゃあシャーシャって飛ばせる?」

「シャーシャってなんだ……。」

「流れ星みたいに飛ばしたいんだね。うん、秒速40キロメートルで起きるプラズマ化現象をドローンで表現するのはなかなかおもしろそうだねえ」

「ごめん、ちよつと何いつてるか分からない。」

「あつ、でもフアラフアラうって飛ぶのも楽しいかも?」

「なんで会話が続いているんだろうか不思議でたまらない!」

「ああ、ルリタテハの飛びかただね?確かにあの蝶の不規則な飛びかたは芸術的だよねえ」

「いったいどうしたら蝶の話しになるのか是非教えていただきたい  
?!?!? 鳳さんフアラフアラしか言ってなかったよね!」

「?… なんだかよく分からんが、こいつら話は通じている、のか?」

「?… 多分通じてると思います。きつと… 多分。」

「そういえば推薦したいと言っていた二人のメンバーはどうしたんだ?」

「ああ、一人の子はそこまで一緒にきてたんだけど、彼女は少し話すが苦手でね?もう一人の子はそろそろ来ると思うんだけどね…  
とりあえず今いる彼女を呼んでくるからまって欲しいな」

「?… ちよつと待って?2人って言ったよね… え?その中の1人って… 僕… なのか!」

「どんな子たちなのかなー!とつても楽しみ!」

「すみません。そこまで期待される人じゃないんです。僕。ただの実験台だから本当に…。」

「ヤバイ… なんか緊張してきて余計に姿を現せなくなった…!!  
どうしよう… たすけてくださいあああ!!」

「まあ、とにかくこれで集まればショーができる人数になる。これでショーはできたも同然!」

「すみません金髪の人。僕、そこまで戦力になりそうもないです…。マジすみません。」

「二人ともお待たせ。連れてきたよ」

そこに現れたのは全然予想とは違いすぎた物だった。

…… 普通さ、人が現れると思うじゃん？ いや、そもそも人が現れな  
きやおかしいはずなんだ……。

そして姿を現したのが…… 「ロボット?!?!」

まさかのロボットだったのだ……。

## ロボットと実験台

二人の目の前に現れたのは、それはそれは大きいロボット。鳳さんは驚きを見せず興奮気味で金髪の人は驚愕している。

「大きいロボットだ〜！あたしの腰くらいまであるよ〜」

わあ… 本当だ、ちよつと離れたところから見ても大きく見える。それにしても… あのロボット誰かに似ているような…？

「お、おい！またロボットじゃないか！これがお前の言っていた1人のメンバーだと言うのか？」

「ああ、そうさ。僕がショーに使っていた自立型と違ってこれは遠隔操作だね」

ほくなるほどね、つまり誰かが操作している分けということだ。

「これもお前が作ったものなのか？」

「ああ、そうだよ」

流石、神代君。なんでも作ってしまう天才。

「二回の充電で3日はフルの稼働に耐えられるし、ショーに適した複雑な動きもできるように設計してあるんだ。いやあ、我ながら素晴らしいものを作ってしまったなあ」

「ええい、自画自賛などいい！それより、操作してる人間はどこにいるんだ？」

あ、それは気になるかもしれない。確か遠隔操作とか言ってたから離れた場所で操作してるんじゃないか…… ない…… か…… な…… ???

ちよつと待って…？いま一瞬チラッて見えたけど、寧々さんらしき人物いなかった??

え？もしかして操作してるの寧々さんだったりする？

「ああ。ここから少し離れたところにいるよ。大丈夫。彼女のコントロール技術には、僕が太鼓判を押すよ」

「はあ…。あのなあ類。俺が欲しいのはロボットじゃない。ショーをやれる人間だ」

「…… なに。なんか文句あんの？」

金髪の人が呆れながら神代君にそう言うとロボットから少し怒っ



た声が聞こえてきた。

「わわっ！しゃべった〜！」

「うん。会話もできるし、コントローラーにはディスプレイがついて  
いるから、こっちの様子もわかるよ」

なにそれ凄い、喋れるだけじゃなくこっちの様子もわかるん  
だ……。

「あたし、鳳えむ！よろしくねロボちゃん！」

「…… 鳳…… それって…… もしかして……」

「ロボちゃん、お名前はあるの？教えて！」

わあ、凄い華麗に無視してるよ…… 鳳さん。でも可愛いから許  
す…… って！なに言ってるんだ僕はっ……！?

「…… 名前？え、ええつと……」

「そういえば、ロボット自体に名前はつけていなかったね。この際、君  
の名前を教えたらどうだい？」

「…… 草薙寧々」

そうだよね!? やっぱり寧々さんだった!! あれは気のせいじゃなく  
て本物の寧々さんだったんだ。

「そっか！じゃあ、この子はネネロボちゃんだね！」

「ネネロボ…… ま、まあその名前でもいいけど」

「会話できるなら、その草薙…… とやらに一言言わせてもらおう！いい  
か？俺たちは、歌もダンスもやる、オレというスターにふさわしい、ハ  
イクオリティをな」

あ、もしかして金髪の方、自分でスターとか言っちゃう痛い人です  
か？

「そんなロボットじゃ、ダンスもままにならんだろう。残念だがメン  
バーには……」

「…… へーえ。自称スターのくせに、見る目ないんじゃないの？」

寧々さん？お口悪いよ？流石に思っても言っていない事と悪い事  
があるんだよ？自称はマズイって……。

「な、なんだと!？」

ほら怒った。

「ロボットじゃ踊れないなんて、誰が決めたんだが、なんなら、ここで踊ろっか?」

「ああ、踊って見せるのはいいね。機能と技を見てもらおう! えむくん、音楽をかけてくれるかい?」

「……大丈夫? そのネネロボ? 踊ったら急に僕めがけて突撃してこないよね? そうだよな?」

「うんっ☆ネネロボちゃんのショー、スタートっっっ!」

「ふん、やってみろ! いくら類の作ったロボットとはいえ……」

「……そんなことも可能にさせちゃうのが神代類って人なんだよな……」

「タ……タップダンスだとー!? あの短い足で!」

ほれ見たことか。

「ふふっ、いいねえ。とつてもいいダンスだ」

「うわー! 足がすごいスピードでバタバタしているよ〜!」

「……あの速さだったら、空ワンちゃん飛べるんじゃないやね? いや、行けるな。だって神代君が作ったんだから…… 神代君で納得してしまう自分が悔しい……」

「からの……な……滑らかなジャズダンス……! ウソだろ……。あんな頭身でできる動きじゃない……!」

「すごいすごい! ネネロボちゃん、ダンスとつても上手だね〜!」

まあ……上手いって次元じゃないけどね。何もかもが完璧すぎるんだよ。

「……どう?」

「い……いや、まだだ! ミュージカルショーは歌こそが最も重要! 口々に歌えんようなヤツは、ステージにあげられん!」

「ふくん。歌えばいいの?」

「へ?」

「~~~~~♪♪♪」

おおっ……流石、寧々さん……。ちよつと離れたところからでも綺麗なソプラノが……。まさに歌姫。

「……わ、わわわ〜! すっごく綺麗な歌! 声もキレイ!」

「そんなバカな… 歌まで…！はっ録音したプロの歌声を流しているんじゃないだろうな！」

「でも、今の歌、ネネロボちゃんの声と一緒にだったよ？」

「うっ！」

「それで？次は何をすればいいわけ？」

「ううっ…！」

まあ… あそこまでやられちゃ、無理もないよな…。

「どうだい司くん。寧々は、メンバーの条件を満たしているだろう？」

「ま、まあ、オレのショーに出るレベルには到達してるが…こいつ、下手したらオレよりも目立ってしまうのでは?!いい、いやまさか…オレは未来のスターだぞ」

うくん…。目立ったら目立ったで、子供ウケとかしそうだし、案外僕はアリだと思えます。

「自分が目立てなくなるかもって不安なら別に入れてくれなくてもいいけど？」

「オレは世界一のスターになる男だ！そんな不安ある分けないだろう！」

「ふくん」

「なんだその何か言いたげな顔は!!」

「気づいた？さすが未来のスター」

あくすっげえ煽ってるなあ…。

「おい、なぜこいつはこんなに好戦的なんだ？オレの才能に嫉妬しているのか？」

それは無いと思うわ… うん。本当に

「あはは、ふたりの相性もバツチリだねえ… それじゃあ、もう1人にも出てきてもらおうかな？」

… … ?

… … ???

は？… いまなんて言った？もう1人にも出てきてもらうって言った？

ちよっと待ってくださいよ？神代さん!?!もしかして… 僕がここ

にいるってこと知ってはいませんか??嘘ですよね??嘘って言うって!?

「ん〜?そう言えば、まだ1人来てないね!!」

「お… おい、まさかそいつもロボットじゃないよな?」

「安心してくれ、ロボットではないよ?ちやんと生身の人間さ」

「では、どこにいるんだ、オレには全く分からんぞ」

「もう1人の子はどんな人なのかな?男の子かな?女の子かな?ワ  
クワク〜!」

… 非常に不味いことになってしまった。タイミングを見計  
らって僕も行こうとしたんだけど、ネネロボのインパクトが強すぎて  
完全に入るタイミングを見失ってしまった。… クツソ心の準備  
があ…。

「それじゃあ… 寧々?そこに隠れている、水上くんを捕まえて来て  
くれ」

「うん」

寧々さんが返事をするとはそれはもうすごいスピードでネネロボが  
突っ込んできたのだ。

「いた…」

「や、やあ… 寧々さん… お久しぶり!!」

僕の目の前に急ブレーキをかけ、肩をガチツツと捕まれた後、その  
ままお神輿のように担ぎ込まれ、皆がいるステージまでつれていかれ  
た。

やさしくネネロボに下ろされたあと、神代君が僕の変わりに自己紹  
介をする。

「彼の名前は水上博、僕の実験台だ」

「は?実験台って… まさか… お前、こいつに変なものを取り付け  
てるのか?」

「心外だなあ。実験台といっても僕が新しく作った機械を水上くん  
で試しているだけだよ」

「ねえねえ!博くん!博くん!類くんとの実験ってどんなことやって  
るの?」

ふと鳳さんがそんなことを言ってきた。実験… 実験かあ…。か

れこれ長いことやってるけど…… まあここは最近やった事でも言つとくべきか……

「うーんと、例えば…… 上空1000mぐらい空を飛んだり……」

「は？」

「爆発したり……」

「ちよつと待て!?!いまトンデモないこと言わなかったか!?!てかよく生きてるな!?!」

天馬くんが顔を青ざめながら言ってきた。相当、驚いているんだろう。それもそうか、やってることヤバいし。驚かない方がおかしいもんなあ……

「うわわわー!それってビューンってしたりドオオン!!ってしたりする?」

「うん。ビューンとかドオオンとかは分からないけど…… 鳳さんが想像していることであつてると思うよ!」

「いいなー!私もやってみたい!!」

…… 多分。実際は…… もつと酷いなんて…… 言えない。

「ところでだ、水上。隠れて聞いていたなら分かると思うが、オレたちはショーをしようと考えているが…… 歌やダンスが必要になつてくる、そこら辺はできるか?」

「いや…… 全然ダメですね!ショーに対して知識全くないし、ダンスは…… 頑張れば…… なんとか…… なるとは…… 思う。歌は…… あんまり自信がないです……」

だつてしようがないじゃないか、実験台しかやった事がないんだもの。

「類…… 本当に大丈夫なんだろうな?こいつ曰く、ダンスも歌も自信がないそうだ、ましてはショーの知識もないらしいが……」

「ああ。水上くんなら大丈夫さ。」

「大丈夫ってな…… お前、なんの根拠があつてそんなことが言えるんだ……」

「…… 僕の実験台だからさ。信用していなかったら、僕はこの場所に水上くんを呼んでいない。彼は努力家だ、必ずどこかで役に立つ。そ

れに、僕の機械たちがショーで輝いてくれるには水上くんの力が必要だしね」

「…なるほどな。類がそこまで推薦するとならば…よし分かった！水上をメンバーに入れるとしよう！」

天馬くんと神代君が話し終わったのか、天馬くんが僕のところに来た。

「確か、水上博と言ったな。オレの名前は天馬司だ！今度から博と呼ばせてもらうからな！ショー仲間としてよろしく頼むぞ！」

「…本当に大丈夫？役に立つか分からないよ？」

「類が推薦したんだ、信じるしかないだろう？」

「ネネロボにはめっちゃめっちゃ反論してたのに??」

「うぐつ…あれは状況が違うだろ…」

どうなると思ったが、これから僕も一員としてショーをやることになった…これから大変になると思う…。歌とかダンス…それに台詞とかも覚えるはめになると思うが…なんとかなるだろう。うん。兎に角がむしやらにやるしかなさそうだ。

「博くん！博くん！わたしの名前は鳳えむ！一緒に頑張ろうね!!」

後ろから元気な声が聞こえて来たので振り替えるとピンク髪で僕も身長が低い方だが僕よりも小さく、パワフルで元気な女の子。鳳さんがジャンプしながら話しかけてきた。

「頑張ろうね!!できるだけ足を引っ張らないようにがんばります。」

なんと言うか、このグループメンバーは賑やかとかなんと言うか、毎日騒がしくなると思うけど楽しそうだなと感じる。

「よし！これでメンバーがそろったね！よろしくね☆ネネロボちゃん！寧々ちゃん！博くん！」

「ま、よろしくね」

「うん。よろしく」

「寛大なオレに感謝するんだな」

「アンタこそ足引っ張ったらビームの的にするから」

「ビーム!?そいつ、ビームがついているのか!?!」

「おおいっ!?!神代君!!なんてもんつけてるんだああ!!最悪僕じゃな

「かつたら死ぬぞ!!」

「お前は死なないのか?!?!」

僕は神代君の肩をつかみグラグラと揺らす。頼むから僕以外に被害を出さないでいただきたい……!!!

「大丈夫……大きなケガはしないように調整してあるから……」

「ああ……それなら安心だね」

「そういう問題じゃなくないか?!」

「みんな、がんばろうねっ☆」

## 劇団名を決めよう!

どうも皆さんこんにちは。

昨日は色々ありすぎたせいか皆と別れ、家に帰った途端眠気が来てしまい布団に入る前に倒れたように寝てしまったようで、目覚めた時には部屋全体に光が差していた時は目を疑ったよね。

まさか・・・学校が始まる5分前に起きていたなんて・・・。時計を見る前まではいつも通りの朝のはずだった・・・そう、いつも通りの朝、のはずだったんだ・・・。自分の部屋から出て、洗面所で寝癖を直し、歯を磨き、顔を洗い、リビングへと向かうと、我らがお母様が机の上にご飯を作っており、椅子に座って「頂きます」と言いながら優雅に食べていると僕に目に入ったのは時計。時刻は8:25分を指していた・・・。時が止まった気がした。最初は深く考え始めていた・・・。んゝ8:25分かあ・・・。ん?8:25分!?・・・あ、1分進んで8:26分になった・・・。あれ?今日学校だよな?学校って何時までに登校すれば良かったっけな・・・。僕はそつとスマホを取り出し、予定を確認をした・・・。えっと、登校時間は・・・8:30分まで、今の時刻は・・・8:28分・・・。あと、2分かあ・・・。・・・。「えっ、遅刻じゃん」

と、冷静な反応をしたが体は凄く急いでいたのでリビングで2回転んだ。

結果的に大遅刻を犯してしまい、教室に入る時にはみんなの目が怖かったが授業が終わった頃には、皆笑ってくれていたもので、なんとなくになった。

そんな壮大な学校が終わり、今日も今日とて神代君に会ってワンダーステージに来てくれと言われたので行くことになった。てか、もうこれから毎日行くことになりそうだ、なんせシヨアのメンバーになったのだから。

自転車を漕ぐごと10〜15分。テーマパークにつき、自転車を止めワンダーステージに着くと、もうメンバー全員が集まっていた。

「博!遅いぞ!お前が最後だ!」



「?これ、天馬くんが書いたの? 凄いね」

天馬くんに渡されたのは分厚くいかにもページ数が多いようなシヨアの脚本だ。

「ああ、そうだ。スターたるオレに相応しい一作になっている」

ほえく…これは凄い、脚本って書くの難しいし大変って聞いているからこの短時間で書いたとすれば素直に凄いとおもうわ。

「へー、つまり、この脚本であんたの頭のレベルがわかるの?」

お…おう…。寧々さん相変わらず天馬くんは毒舌が強い…。

「くっ… いちいち突っかかってくるロボめ…! この脚本が高尚すぎて理解しても解説はしてやらんからな!」

「あんたに解説されたら余計に混乱しそう」

「ふたりとも、すっかり仲良しだね」

「いや、鳳さん… 僕にはとても仲良しには見えないけどね…」

「うんうん。まさに同レベルの会話だねえ」

”同レベル”って…ええ…。

「そうだ! もうひとつ大切な事を発表しよう」

お、どうやら天馬くんかや大切なお話があるようだ何かな?

「大切なこと? なになに?」

鳳さんが可愛らしくピョコピョコ跳ねながら天馬くんに聞いた。

「劇団名だ! 公演するなら劇団名が必要だろ?」

劇団名か… そう言うのを決めるのあんまり僕、得意ではないんだよな…。ここは皆に任せるべきか。

「確かにそうだね。それで、なんて名前にしたんだい?」

「あれ? もう天馬くんが考えてる感じ?」

「あたりまえだ! オレを誰だと思ってる! 未来のスターだぞ! とびきりカッコイイ劇団名に決まっているぞ!」

天馬くんは高々と頂点に指を掲げて劇団名を言った。

「その名も… 『劇団ペガサス☆インザスカイ』」

その劇団名はあまりにも… あまりにも…。小学生が考えそうな痛い名前であった…。

「うわ、ダサ」

「な…なに!?」

あ、やべつい本音が。

「…うん、ダサ」

いま、天馬くんの心臓に透明な矢が2つ刺さってるの丸わかりだあ…。だってしょうがないじゃない、ホントにダサかったんだもん。

だって見てよ、あのクールで実験バカヤロやろうの神代君さえ、ビミョーな顔してるし…。

「ダ…ダサいだと!?」

「う…うん。ゴメン天馬くんまるでセンスがないと思います。」

あ、やべ、また天馬くんの心臓に透明な矢が…。

「この名前のどこがダサい!これほどまでにセンスが光る名前があるか!」

あ…この感じ、まるで自覚がないみたいだな。

「どうしてダサいのか…か。分析は難しいね。ただ、もし一言で言うとしたら…」

よし、神代君?黙ろうね?これ以上、天馬くんに精神的ダメージを与えてはダメだ(ほぼ博のせい)

「シンプルにダサい」

ね、ね、寧々さあああああん!!!天馬くんのライフはもう0に限りなく近くなってるからっ!!それ以上は辞めてあげてっ!!!

「それだね」

もう、めちやくちや言われちゃってるよ天馬くん、なんか知らないけど僕も変なこと言ったらこうなってたっと思おうと悲しくなってきたなあ…。

「お前ら、人が考えてきたものをく!!じゃあ他にアイデアがあるのか!?!」

やめてください、僕に振るのだけはやめてください。天馬くんとは名前同じことって寧々さんに『ダサ』って言われるの分かっているんでやめてください。

「そうだね…。えむくんと水上くんはどんな名前がいいと思う?」

神代君でめええええええ!!この、神代類って人やりました!!僕も  
ネーミングセンスないと知って指名しやがったよこの人!!みて、  
あの悪い顔!!タチ悪いよ...僕の幼なじみタチ悪いよ...!!クツ  
ソオ!!...とりあえず鳳さんに話を振るんだ!!

「お、鳳さんはなんかいい名前思いついた??」

「んく。『おひさま世界のサニサニパワー』とか『お花畑のハナポン  
サク』とか?」

おっしやあ!!!なんとか候補が出たぞ!!どうだ神代くんさんよお!!

「... 教育テレビ番組」

「というか、その”世界”ってなんなんだ?」

あゝ... そう言えばどっちとも”世界”って言葉両方入ってたね。

「ワンダーステージはね、ショーでいろくんな世界になるの!」

「例えばさ、どんな世界になったりするの?」

ふつうに気になったので鳳さんに聞いてみた。

「うくとね、ジャングルの世界になったり、雲の上の世界になったり、原始人の世界になったり、宇宙人の世界になったり、どくんな世界にもなっちゃう、ワンダーランドなの!だからショーの時間が始まると、みくんな笑顔になるんだよっ☆」

「ふむ...。ならそれがいいんじゃないかな?」

どうやら神代くんが納得した様子でした。

「うん?」

「このステージが生み出すワンダーランドで、素晴らしい時間を過ごしてほしいんだろう?そんな思いをこめて、名前を考えてみたらどうだい?」

おー、なるほどね。うーん、ワンダーショータイムとか?

いや、やめとこう、言うのが怖くなってきた。

「むむ... ワンダーランドで... 素晴らしい時間を...?」

「時間... ショータイム、とか?くつつけると、ワンダーランズショー  
タイム... になるのかな」

あれ?割とさつき適当に考えたやつと近くね?ランズが抜けてる  
けれども...。それにしても... ”ワンダーランズショータイム”

かあ…いいね。

「わくっ！かつこいい！じゃあ台本の表紙に書こーっ！」

「あつ、いや待て！どう考えても劇団ペガサス☆インザスカイの方が…」

「天馬くん…もう遅いみたいよ？」

「できた！『ワンダーランズ×ショウタイム』！」

ふと、鳳さんが書いた文字を見ると『×』が入っていた。

「この『×』はなんなんだ？あと、『ショウ』なんだ？伸ばし棒だろうそこは！」

どうやら天馬くんが代わりに聞いてくれたらしい。

「『×』はかけ算だよ！ショーをやった分だけ、ワンダーランドが増えていくから！」

おっいいね、縁起がいいよそれ！

「で、『ショウ』なのは…カツコイイから！」

まさかの単純で”カツコイイ”から。まあそれはそれでいいんじゃないかな。

「あ、あのなあ」

「ふくん。ま意外と悪くないね」

「うん、僕もいいと思うな」

「そうだね、僕も嫌いじゃないよ。直感は大切なものだ」

「うぐぐ…はあ…まあいいだろう。大事なのはショーの内容だからな、名前も決まったことだし、これから気合いを入れていくぞ！」

「うんっ！がんばろっ！おーっ☆」

「うわっ!？」

なにがおこったのか分からなかったためビククリしてしまったが落ち着いてみたらいつの間にか左手が上に上がっており、温もりを感じるかと思っただらまさかの鳳さんと手を繋いでいた。

なぜだろう、誰からの視線が痛い。

「ビククリしたじゃないか鳳さん…！急にやるのはビククリするからやる時は報告してからやってくれなきゃ困るよ…」

「えへへ…ごめんなさーい」

「全く… お前らは…」

「ふふ… 仲がいいね」

「……………」

可愛らしくニコニコしながら見てくる鳳さんと呆れた顔で見てる天馬くん、僕たちの仲良くしている姿をみて微笑む神代くんと何故かさつきまで喋っていたのに急に黙り出すネネロボ。

こうして正式に劇団名も決まったことだし、シヨアの練習を頑張ろうと誓った僕であった。

『ワンダーステージの裏』

「… い、い、いま… 博と… て… 手を繋いで… た？ 私はまだ繋いだ事ないのに… ずるい… ずるい…」

## 神代類 暴走する

「司くん、いい演出を思いついたよ、少し聞いてくれるかい？」  
「おお早速か！どんなアイデアだ？」

僕ははいま、天馬くんが書いてくれた台本を読みどんなお話か確認をしていた。

内容としてはオーソドックスな英雄譚で主人公の王子ペガサスは人々を苦しめる魔王を倒すべく旅に出て、道中仲間を見つけ、まずは村を苦しめるドラゴンを退治、そして最後は魔王を倒したペガサスは英雄として町に戻っていくというお話だ。

話の内容を理解した、神代君が早速演出を思いついたらしい。……余計なことを言わなければいいのだが。

「観客が王子ペガサスに深く感情移入できるように、過酷な旅の始まりへの強い決意を表現したい」

「ふんふん」

「そこで、雷を落とそうと思う」

「なるほどなるほど…… 雷をねえ……」

え？

僕の頭にも雷が直撃したような気がする。

「ふんふ…… うん？」

……もう一度確認したい。なんて言った？この神代さん。雷を落とそうって言ったのか？… え？死ぬよ？

「雷!?カッコイイ!!」

「鳳さん!?カッコイイの問題じゃないから!?最悪死に至るから!」

「だろう?そして丁度ここに、プラズマを発生させる装置がー」

「いやいやいや!なぜそんな物がある!」

これには深く天馬くんに同意だ。

「こんなこともあるかと思って用意しておいたんだよ、司くん」

「いい顔をするな!だいたい、そんなものどう考えても危険だろ」

「装置を舞台上に固定しておけば、お客さんは安全だよ。触ったら死

ぬけどね」

「……なんて軽々しく”死ぬ”という言葉が出てくるんだろうか  
恐ろしすぎる。」

「オレのリスクが高い！」

多分…… 天馬くんのリスクを減らすために僕が実験台になって調  
整する型になるんだろうな…… 命が幾つ会っても足りない気がする。  
る。」

「あーあ。また始まった……」

「また？」

「…… 類はショーでやったら面白そうなことを思いついたら、かたつ  
ぱしから試しちゃうのそれでよく、クラスメイトを体育館で宙吊りに  
したり、プールで水責めをしたりして……」

ああ…… そんなこともありましたね…… まあ、僕が結果的に全て受  
けているんですけど……。

「そんなんだから、最初はショーをやろうと言ってくれた人も離れて  
いつちやうんだよね…… でも博(実験台)がいるからその役目は博に  
なってるんだけど」

「ええ〜！博くんだけズルい!!」

「いや……ズルいって言われてましても…… 本当にも命に関わることだ  
からまあやるとしたらそれなりの覚悟は必要かもね」

そんなことを話していると話を聞いた天馬くんが僕の肩をポンと  
優しく触ってきた。

「博…… オレはお前のことが心配になってきたぞ……」

え?!いま凄く哀想な目で見られてなかった!?!

「とにかく〜！そんな危険な演出は絶対にダメだ!」

「そんな…… どんな演出にも12000%の結果で答えてみせると  
言ってくれたのに……! そういうことなら、残念だけど僕は演出家  
を辞退しよう。水上くん、寧々、後は頑張っつー。」

「えー!やらないの?ステージで雷がピカーってしたらとっても目立  
つのに!」

まあ…… 目立つは目立つけど…… 逆にお客さんに心配されそうで

怖い。

「!?目立つ……!!」

おい。今、目立つで反応しなかったか?この自称スターさん。

「た……確かに、目立つな。雷が落ちるなど前代未聞……かなり話題性がある」

「お客さん、いーっぱい集まっちゃうかもしれないよ!」

もし、失敗したら逆の意味でお客さん集まっちゃうよ……?

「うっ……類…… ちょっとくらいならやってもいいぞ」

「え?」

「べ、別に目立つという理由じゃないぞ。『嘘つけ!!!』斬新さはスターのショーに必要な不可欠だからな!」

この人、嘘ついてます!!!ただ単純に目立つからやりたいだけの人です!!!

「……へえ……それじゃあ……ドラゴンと戦うシーンで火炎放射器を改造した装置を使ってみてもいいかな?」

「な、なに!?!」

「あとは、魔王と戦うラストシーンで、10メートルほど飛んでみるのはどうだい?以前、足立から強風をあてて浮かせる装置を作って見たんだ、あのシーンで使ったらきつと面白いんだろうあ」

ヤバイ……完全にスイッチ入ってるわ……。

「ど、どっちもメチャクチャ危険では……」

はい。何を今更、メチャクチャ危険ですよ。

「だ、だが、どちらも目立つ……!!ならばスターとしてはやるしかない……!!」

もうダメだあ……!!天馬くん……もう君は目立つ為なら何でもやってしまう男なんだね……。

「わーい!とつても楽しそう!他には他には?」

「じゃあせっかくの屋外ステージだし、滝をつくって……」

いや……まって、ちょっと待ってよ!?!とつともなく嫌な予感がするんだが……。

「おいつ!?!ちよつとまって!?!色々な案を出して行動に移すのはいいと



思うんですが… それぞれの機械の実験誰がするのか分かって言ってます!？」

「水上「博だろ?」くんでしょ! 頑張つてね!! 私もやりたかったな!」  
「くんが決まってるじゃないか何を今更言っているんだい? ハッハ☆」

「… あ… はい。頑張らせて… 頂きます」

僕… 生きて帰れるのだろうか… ?

「… これ、どう收拾つければいいわけ?」

1人悩む寧々さんであった。

そして、あれこれ色々、案が出ていき、みんな夢中になって話をしていたらいつの間にか日が暮れていた。

「ふう… 気づけば演出の話だけで日が暮れてしまったな…。明日は朝7時に集合! 入園用のスタッフカードは各自持って帰るように!」

「「はい」」

という感じでそれぞれ別れ、僕は久しぶりに2人の幼なじみと帰っていた。

「… 珍しく機嫌いいじゃん」

ふと、寧々さんが神代君にそう呟いた。

「ん? 僕はいつでも上機嫌だよ? それじゃあ、水上くん、寧々。僕はここだ」

「え? どこかに寄るの?」

「ああ。舞台装置を改良するのに、足りないパーツがあるんだ、さて、どこから手をつけようかな… ?」

「あんまり無理をしないでね神代君」

「それ、博も言えた事じゃないから」

「… あはは… 気をつけます」

ほんとに仰る通りです。

「それじゃあ水上くん、寧々を頼んだよ?」

「うん。」

そう返事をするとう神代くんは違う方向へと歩き去っていく。  
隣にいる寧々さんを見ると微笑みながら神代君の後ろ姿を見ていた。

時刻は夜を超えて、朝の7時になる。今日もワンダーステージでみんなが集まっていた。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ……」

「へー。口先だけかと思っただらわりと演技もダンスもできるじゃん」  
「うーん、とはいえ、それはペガサス王子の戦い方として適切かな？  
もつと体の使い方を考えて欲しいな」

「じゃあこれで……どうだっ！」

「動きは格段に良くなっているね。ただ……だからこそ、物足りなさをを感じるよ」

「ハア、ハア、ハア……。も、もう1歩も動けん……!!」

「おやおや、もう音を上げるのかい？」

「くっ……。!!お前……想像以上にスパルタだな……」

まあそれだけショーに力を入れてるって事かな？

「自称スターもしかしてスランプ？」

寧々さん……相変わらず毒舌だなあ。

「ええい、そんなわけあるか!……だがしかし、何かヒントが欲しいな……」

「あっ☆それならあそこに行ってみようよっ！」

天馬くんが悩んでいると鳳さんが1つ提案を出した。

「あそこ?どこかい場所があるのかい？」

神代君が聞くと自信満々に鳳さんが答える。なんて可愛いらしいんだらう。

「うん!私のスマホに『Un t i t l e d』って曲があつてミクちゃん達のいるセカイに行けちゃうんだよ!」

ん?ミクちゃん……??ミクちゃんって……あの?まさか……

「……お、鳳さんミクちゃんってもしかして初音ミクのこと言ってる?」

「うん！そうだよ!!」

いや：： まって：： 理解できそう理解できそうにもないんだが!?セカイ!?初音ミク!?え??

「Untitledってお前のスマホにもあの曲が：：!?えむ、お前まさか、またあの妙な場所へ行くつもりか!?!」

「うん！いつの間にか入ってたんだー♪司くん！類くと博くとネネロボちゃんのことミクちゃん達に紹介しに行こー!」

「あ、おいやめろー!!!」

と天馬くんが鳳さんを止めようとするが間に合わず曲が再生された同時に僕の視界は真っ白になった。

## ワンダーランドのセカイ

「うえ!?どっこい!?!」

急に辺りが真っ白になりちよつとだけ目を瞑って開いたら謎の場所に来ていた。

空飛ぶ汽車、空中に浮いているメリーゴーランドがある。一言で表せばテーマパークみたいなどころだ。

「あ、ああ…。ああ…。また来てしまったー!」

天馬くんの発言からすると、多分彼は1度この謎の場所に来たことがあると予想した。…。となると、あの曲を再生させた鳳さんも…か?

「え…。ここ、何!?!」

「いつの間にも移動したんだ?」

神代くんと寧々さんも連れてこられていたようだ。

「おい、えむ! さつきと元の場所に戻るぞ」

天馬くんがさつきから帰る帰るとか言ってるけど…。…そんなところの場所が嫌なのか?

「あれれれれ?今日はいつぱい来てる☆わくわく!」

1人でそう考えていると予想外な人物が出てきた。明らかに人間では出せない声で、その声をする方へと目を向けると、赤い耳が生えている”初音ミク”がいたのだ。

「初音…。ミク?でも僕が知ってる初音ミクじゃない?」

「あつ!ミクちゃんだ!ミクちゃん!来たよ♪」

鳳さんが嬉しそうに初音ミクらしき人に駆け込み飛びついた。

「みんな、セカイにようこそ☆」

「やあ。また来てくれたんだね司くん、えむちゃん。今日は新しい友達も連れてきてくれて嬉しいよ。」

「え??????」

「カイトお兄さん!あのね、あたし達5人でショーする事になったんだ!」

「初音ミクとカイト…？え、映像じゃないよね」

「いや…映像だったならこんな綺麗に見えないと…思う。だって普通に喋ってるし、現在進行形で動いてるし…神代くん。これどう思う…あ」

神代くんにも話を振ってみたがどうやら遅かったらしい。

「バーチャル・シンガーが実在するように見えるつまりと言うことはここはバーチャル空間である可能性が高い。けれど僕らの肉体はここにあり変化した形跡もない…すると彼らが実体化していると考えるのが妥当だけれどあの体は僕らとそう変わらないように見えるつまり肉体を作り出されたというよりこの空間が彼らを実体化させている…？ならまずはここがどんな場所なのか調べて見なくてはね！フフ！演出のヒントが山ほど眠ってそうだね！フフフ！！」

変人発言しながら神代くんはどつかに行ってしまった。

「お、おい！どこに行くんだ類！」

「あ…ああなっちやうともうダメだ…」

「多分、とうぶん戻って来ないだろうね…」

はあ…と寧々さんと僕がため息を同時に吐いた。なんだろう…この感覚、我が子を見守ってるみたいなのが状況は。

「今日はよく来てくれたね。本当の想いは思い出せたかい？」

僕たちに今度、話しかけてきたのはカイトさんでチャームポイントの青いマフラーは付けていなく、いかにもショーの座長をやっているような服装をしていた。

「いや、だから俺の想いはスターになることで…」

「あ！今日はね、司くんがスランプだから、演技のヒントを貰いにきたんだよ！」

「演技のヒント？」

「べ、別にスランプじゃない！まだ役が肌に馴染んでないだけで…」

「天馬くんそれスランプって言うんだよ？」

「うぐっ…！」

「よかつたら台本を見させてもらえないかな？」

そう言われ天馬くんは右手に持っていた台本をカイトさんに渡し

た。台本を読むこと10分、カイトさんが口を開いた。

「…… ふむふむ。この王子が司くんの役みたいだね」

「そうだ！勇敢で知的！まさに王子の中の王子！」

「なるほど。すごくカッコイイ人物なんだね。僕ならどうやるかな…… そうだ！試しに僕が王子をやってみようか」

「いいの？やった〜！」

鳳さんが大きく飛び跳ねた。

カイトさんがどうやらお手本を見せてくれるという事で僕達3人は地面に座りながらカイトさんを静かにみる。

カイトさんの目付きが変わった気がした。多分役に入ったのだろう。

それからの演技は凄まじく、喋り方、戦い方などハイレベルな演技でショー初心者僕でも鳥肌が立つ程、凄いことが分かった。

「はっ…… な、なかなかやるな！だが、これでヒントは掴めた！今のオレなら、更にパワーアップした王子になれる！よし、帰って練習の続きをはするぞ！」

ハイレベルなカイトさんの演技をみて、コツを掴んだのかさつきよりもやる気があがっている。

「いや〜。とてもいい場所だねえ、ここは！」

神代くんもどうやらセカイの探検が終了したようだ。

「おお、類。戻ったか。演技のヒントも掴めたとこだ、そろそろ帰……」

…… うん？神代くんなんか持つてる……？切実に嫌な予感しかしないんだけど。

「司くん、とても不思議な生物を捕まえることに成功したんだ！体は綿でできているんだけど、なんと言語を理解するんだよ！」

「ウウ…… タスケテ…… ツカサくん……」

「うわあ!!?ぬ……ぬいぐるみ?!?てか喋ってるし!!どっから持ってきた神代くん!!!」

「いやあ……色々な所を探索していたら見つけたんだよ！持ち帰って研究してみようと思うんだ…… 中身はどうなっているのかな

「？」

「け、研究…!!?そんなこと神代くんがしたら… このぬいぐるみは…」

「ゴ、コワイヨ…」

「こんなもの持ち帰るな!これはここに置いていく!」

と天馬くんも強く否定した。

「ええ?せっかく捕まえたのに… それに改造したぬいぐるみで水上くんを宇宙に連れていこうと…」

そんな悲しい顔してもダメです。

「……今なんて言った!?宇宙!『陸、海、空』ときたら宇宙行っちゃうの!」

洒落になりませんよwwww神代さあーん。死んじやいますって…… え?ほんとに宇宙だけは… 死ぬよ???

「これ以上、変なもの増やしてどうするつもり?博は大丈夫だけど」

「そうだ。水上は別に大丈夫だが、こればかりはロボが正しい。さあもう帰るぞ!」

「うん、そうねもう帰ろう…。ちよつと待って!?天馬くんと寧々さん今なんて言った!?!」

「……………」

おい。なぜ2人とも一斉に黙る。なんでそんな顔で見る天馬くん『オレお前の扱いに慣れてきたぞ』みたいな顔をしている。

寧々さん… ロボットだから感情わかんないけど、絶対ニッコリしながら言ってるよね?

え?なにこの人たち、ついこの間まで不仲だったよね?僕のことになると気が合うってどゆこと???

「え〜みんな、帰っちゃうの?一緒にショーやろうよ〜!」

「断る!スターになるためには、これ以上無駄な回り道をする訳にはいかんのだ!」

「ん〜。司くんはスターになってどうするの?」

「え?ど、どうって… ショーをするんだ!そしたら、きっと沢山の観客が集まる!」

「でも、ここでショーをすれば、もっともーっとステキなものが見つかるよ。」

「もつとステキなもの？なんだそれは？」

「ひーみっーだよ☆」

「む！そうやってショーに無理やり出すつもりだろ！オレは騙されないからな！」

「残念だけど仕方ないね。また困った時は、いつでも来てほしいな、司くん。気が向いたら一緒にショーをやろう。そうすればきつと……」

「え？」

と天馬くんが言った瞬間、また視界が真っ白になり気づいたらワンダーステージに戻っていた。

「きつと…… なんなんだ？…… まあいいか」

「あれ？ネネロボちゃん…… なんだか元気ない？」

『…… ロボットの顔みて何か分かるの？』

「でも何となく、しょんぼりしてるように見えたんだけどなー？ねー博くん？」

「うえ？うーん顔みて僕は判断できないからわかんないかなあ  
〜……」

「うーんそっかあ…… 私には元気がないように見えたんだけどなあ……」

「よし、練習再開だ!!」

天馬くんの掛け声で僕達は再び練習を開始した。



明日の為に…

「さあ、司くん、このシーンで重要なのは躍動感だよ。肉体を解放するんだ！限界まで足を上げて！」

「だーっ！体が裂けるーっ！！オレの肉体よ持ちこたえろーっ！！」

『歌を教えて欲しい？』

「うん！あたし、おっきな声出すのは得意なんだけど、歌うと、司くんにうるさいって言われちゃうんだ」

「あ、えっと僕はその逆で天馬くんに「小さすぎだっ！！」って言われちゃって…」

『……別にいいけど』

「本当!?ありがとう、ネネロボちゃん!!じゃあ歌うね!わんだほわんだほわっほっほ」

『……ふふ、何その歌』

「シヨールに集中してもらおう為にも客席は修理せねばな！」

「うわ、ここめっちゃ汚れてるよ…拭かなきゃ」

「そうだ。この座席をシヨールに連動して動くようにするのはどうかな？」

「あ、知ってる!がががプシュー!ズドン!グワツ!パリーン!つてなるやつだよね♪楽しそう♪」

『いや、無理でしょ……』

☆

「本日はありがとうございました！」

「うん、完璧だね。素晴らしい最終リハーサルだったよ」

あの訳分からないうセカイから出て時間がたち、僕たちワンダ×ランズシヨウタイムは本番に向けてのリハーサル、客席などの修理などをしていた、今日僕がやったことと言えば、鳳さんと寧々さんとの歌の練習、天馬くん曰く僕は音痴では無いが声が出てないらしい、シヨールではみんなが歌うのだが、そのままの状態では歌声はお客さんには届かないだろうと天馬くんに厳しいお言葉を貰った。

歌のことになると寧々さんが一流なので相談しに行こうとしたら先客がいた。鳳さんだった。

鳳さんは僕の逆で天馬くんにうるさいと言われたらしい。

そんな相談を2人で寧々さんに言ったところ教えてくれる許可を貰えた。寧々さんに「ありがとう」と言ったら少し下を向いてしまい、顔が赤くなっていた為、心配したら「だ、大丈夫。夫だから練習して...」と言われてしまった。怒らせてしまっただろうか。

そんなこともあり時間があつという間に過ぎて夕方になっていた。

最終リハーサルも終え、僕たちは軽く雑談を始めた。

「本番もすつごく楽しみだね〜!!」

『..... うん』

「本番かあ... 緊張してきた...」

「なんだ博? 緊張するのはまだ早いぞ? お前も練習してきたんだ、その努力を本番で見せつけなければいい! まあオレのスター性がありすぎて薄れるからなははは!!」

なんだろう、最後の言葉がなければカッコよかったのに残念すぎるよ天馬くん。

「宣伝も着ぐるみくん達に手伝ってもらって、十分できたからね。きつとお客さんもたくさん集まるはずさ!」

「それと、本当に全ての演出プランに对应してもらえとは思わなかった... ありがとう。おかげでとても楽しかったよ」

そう言えば、今回あんまり僕は神代くんの実験台にはならなかったような...。

「類。もう終わったかのような言い方は早いぞ。本番は練習の100000000倍のショーを見せるぞ!!」

「フフ。根拠のない数字がまた出たね。だが... そうだね。いいショーにしよう」

「そうとも! このステージから、オレのスターへの道が始まるのだ!」  
『またスタースターって、それ飽きないわけ?』

「なんどでも言え! オレはこの舞台に手応えを感じているんだ! きつとスターに近づけるぞ!」

そう言ったあと一息入れて天馬くんは言い出した。

「類、寧々、えむ、それに博。みな、オレに及ばんがよくついてきてくれたな。明日のショーは必ず素晴らしいショーにするぞ！」

『別にあんたについてきた覚えはないけど……ま、明日はみんなが喜んでくれるといいな……』

「司くん！」

すると鳳さんが突然、天馬くんの名を呼んだ。

「ん？」

「あたしのほうこそ、ありがとう！」

鳳さんは嬉しそうな顔をしている。

「なんだ？急に真面目な顔になって……」

「あたし、このステージにショーを見に来てくれる人が、みーんなニコニコ笑顔になってくれることが夢だったの」

「そういうえば、えむは最初からこのステージにこだわっていたな」

「司くんのおかげで明日はきつと、あたしの夢が叶うから……。だから、ありがとう！」

なんだろ……このシーン1つの物語みたいな展開……天馬くんのおかげで鳳さんの夢が叶うって、凄くロマンティック……!!

「……そうか。まあ、実際、オレのようなスターがいなければ、まともにもショーをやることはできなかつただろうしな。ハハハ！」

『また調子乗ってるし。』

「その一言がなければ完璧だったんだけど……まあ天馬くんらしいよね……！」

本当、彼らしい。

「じゃあ、今日はここで解散かな？明日は早いしね」

「ああ、そうしよう。それでは明日、またこの場所だな!!」

「うんっ！ばいばい!!」

☆☆

みんなと別れて僕も自分の自転車へと向かった。今の時間はどれくらいなんだろうか。ポケットに手をつ突っ込む。

無い。

もう1つのポケットにも突っ込んでみた。

無い。

カバンの中も漁ってみた、あるのは筆箱と明日、本番に望むための台本。どうやらスマホを置いてきてしまったらしい。

僕はため息をつきながらワンダーステージへと足を運んだ。

草むらから抜けると帰ったはずのメンバー寧々さんが1人でステージにいた。

「……ペガサス王子がこう来たら、こっちに行って……ターンしてから、セリフ」

『ココハワタシニ、マカセテクダサイ』

「あとは歌って……うん、この流れは大丈夫……でも、もう1回やっておこう」

あー、自主練してたのかあ……集中してそうだし……ステージには行けないかあ、邪魔してもあれだし。

「やあ。やつぱりまだいたんだね」

なんだ、神代くんもいたのか。

「……な、何……覗き見?」

神代くんがいるんじゃあ、僕も姿を現しても問題ないか……。

「えーっと……覗き見じゃないけど……ごめんね練習中に。」

「博まで……」

「やあ水上千くん君も練習に来たのかい?」

「うん?僕はね、スマホを取りに来たんだよ……えっくつと……あ、ほらここに」

証拠にスマホを2人に見せて閉まった。

「2人はまだ練習するの?もしするんだったらさ、僕も一緒にやってもいいかな?明日本番だし」

「いや、僕は寧々にあまり根を詰めないように声をかけにきたんだよ」なるほど神代くんらしい。優しさが見える。

「……でも失敗したくないから」

うーん……とても分かる。

僕は本番にとつともなく弱いからセリフとか飛んじやったら最悪だよ。

「ふふ。それは僕と水上くんだったって同じだよ。だから僕たちも付き合おうじゃないか」

「……うん。ありがと、じゃあドラゴンを歌で眠らせるところ、一緒に練習してもらってもいい？ちよつと心配で……」

「もちろんだとも」

「じゃあドラゴン役やるね」

できるか知らないけど。

☆☆☆☆

「完璧だね。この調子なら、きつと大丈夫さ」

「うん。同意見、今までよりも素敵な声が出たよ、いいと思う！」

「そ、そうかな」

手をもじもじさせながら喜ぶ寧々さん可愛い

「……でも、お客さんさんに喜んでもらえたら嬉しいな」

「ああ、そうだね、それじゃあ明日に障るし、僕と水上くんは帰るけど、寧々もそろそろ……」

「あ、最後のシーンの歌はもつと緩急つけたほうが……」

(神代くん、寧々さん夢中になっちゃってるよ)

(……そうだね、今は声をかけないでおこうか)

寧々さんが満足いくまで、神代くんは僕のことも見えてくれた。

「うん、水上くんも問題はなさそうだね、良くなっているよ、明日が楽しみだ。」

「本当に!?いや〜そこまで言われると照れちゃうなあ……頑張ったかいがあつたよ……」

「……博、類、お待たせ、帰ろう」

お、寧々さんも満足したらしい。明日は本番だ気合いを入れていこう!!!

そして、あつという間に夜は過ぎ本番の時刻となっていた。

☆☆☆☆

「天気快晴ッ！気温安定ッ！満員御礼ッ！お前ら絶対に最後のショーにするぞ!!」

「わく！お客さん、いつくつぱい!!」

周りを見渡すと、どこもかしこも人、人、人!!!満員になるとは聞いていたがまさかこんな人がいるとは...ウツ...!お腹がっ...!!!  
「本当だね。たくさん集まってくれて何よりだ。」

『.....』

「ん？何やらロボが大人しいな。まさか、緊張してるんじゃないだろうな？」

「そ、そんなわけ.....」

「き..... きんちよーしてるわけアハハないよ...!!やめてよね天馬くん?!?!」

「水上... お前は緊張しすぎだ... リラックスしろリラックスを...」  
すみませんごもつともです。

「いいか？客は全員、最後に目立つオレを見る！妙なロボットなど誰も注目せんから、緊張するだけ損だぞ！ハッハッハ!!!」

『..... あいつ』

「司くんなりの激励... かな」

「あんなの、どう見てもド天然で言ってるでしょ.....」

「じゃあみんな、今日もやろう！セーの... みんながんばろ、わんだほ〜いつ☆」

「「わんだほーい!」」

「だ〜っ！逆に気が抜けるわっ！いいか？こうだ！ワンダ×ランズ ショウタイム、公演スタートだッ!!!」

本番が始まる...!!!

自分がやってきた事を信じて

『悪の魔王を倒すため♪私は旅立つのだ♪』

天馬くんことペガサスは高々と拳を上下に振り下げて歌を歌いながらネネロボの方へと突き進む。

シヨーが始まり、さつきまでの緊張がもつと大きくなってきた気がする。

何度も自分で心を落ち着かせるが、心臓の音が身体中に響いてしやうがない。

お腹も痛くなってきて、頭も痛くなってきた。

本当に大丈夫なんだろうかと頭の中で何度も問いかけてくる、失敗したらどうしよう、台無しにしてしまったらと。

「はあ……………」

壁に寄りかかり、もう何度目か分からないため息をした。

「緊張、してるのかい？」

ふと声をかけられた。

「まあね……………緊張しない方が難しいよ、不安すぎるしなんせ、シヨーを大事にしたくない、本当に大丈夫かなあ……………」

そろそろ出番が近くなってきた事を悟り、不安と緊張が大きくなり始めたのか、つい声をかけてくれた神代くんの本音をぶつけてしま

う。  
「おや、水上くんらしくない弱音だね、僕の実験の時は堂々としているのに」

「……………」

彼なりに励ましてくれているのは分かるのだが、今はそれよりも『やりたくない』という気持ちで勝ってしまったている。

これはただの逃げだ、自分でも分かっている。

「怖いのかい？」

「うん……………」

そう答えると神代くんは僕の頭にポンと撫でるように置いた。

「じゃあ……………そうだね。水上くん、別にミスをして来てもいいんじゃない

ないかな？」

「……え？」

ミスをしてても良い……？

「ああ、そうさ！ミスをしてもいい、そんな気持ちでぶつかって行けばいいだろう」

「で……でもそんな事したら……」

「だが、僕には君が「ミス」と言う事を犯すには思えないよ、なんだって僕のたった1人の”相棒”だからね。例えミスをしたとしても、必ず僕たちがカバーをしてみせるから！水上くんは水上くんなりに自分が最高と思えるありつたけの力で演技をしてくるといいさ!!!」

優しく頭を撫でていた手は僕の右手を掴みステージの入口へと導かれる。

そこにはやる気満々の鳳さんも居た。

「類くん！博くん！みんなが笑ってるよ!!」

鳳さんが笑顔でこつちを向きながら言ってきた。

「ああ。いい滑り出しだ。さあ、次はえむくんと着ぐるみさんと水上くんの出番だ。司くんと寧々が繋いでくれた分、2人とも頑張ろう！」

「博くん！一緒にお客さんの事、にっこにこにしようね!!!」

「頑張らさせて……いただきます!!」

なんだろう、このチームなら頑張れる気がする。

不思議と緊張は無くなっていた。

僕がこれから演じるのは魔王のドラゴンのお世話係・エムムの下に着いている剣士だ。

黒い長いマントとにかく全身黒の服装をしている、めちやくちや怪しいヤツだ。

名前は「ハクビシン」人の家の屋根とか地下に住む、猫みたいな見た目をしている動物だ。

ステージの上でみると眼に直ぐ映ったのは客席にいる満席のお客さん。

心の中で関心しているとセリフが始まった。



『あたしは魔王様のドラゴンのお世話係・エムム！王子なんて、ペッチャンこにしちゃうぞ〜！』

『くっ！あんな巨大なドラゴン、どう倒せばいい!?』

さあ、次のセリフから僕のターンが始まる。

出番とシーン自体は少ないが…… どれだけお客さんの眼に止まるか勝負所。

自分を押し殺せ……!! 悪役になりきれ!!

『ちよつとまてよ』

すると背中から刀を取り出し、さつきまでドラゴンの後ろに隠れてた少年がゆつくりとドラゴンの前へとでた。

「っ!? 貴様は……!!」

邪悪なBGMと共に現れた『ハクビシン』はペガサスの元へすたりすたりと歩いてくる。

「ここはドラゴンさんの出番はないですよエムムさん……。この俺がズタズタにしてあげましょう。」

不気味な顔と少し色気がある言い方をした瞬間、目にも留まらぬ速さで、ペガサスの首元へ刀を振り落とした。

「……!!」

「ほう…… これを避けるとは。流石、王子という所ではあるではないか、じゃあこれはどうかなっ!!」

今度は連続切りをお見舞いし王子に攻撃を許さない猛攻を仕掛ける。

ガキン!!カギン!!と刀と刀が削られる音がステージ中に響いた。

「くっ……!!」

「ほら、負けてしまうぞ!!王子ペガサス!!いいのか?こんな所で苦戦しては、魔王どころかドラゴンにも勝てないぞ?」

フハハと微笑んでいるハクビシンはペガサスに煽りを入れる。

「…… 私は!!絶対に負けないっ!!魔王を倒し!そして世界を平和にするのだ!そのためには貴様見たいな邪悪な奴は倒してやる!!」

強い意志と共に押されていた刀にも力が入ってくる。

さつきまで優勢だった、ハクビシンが今度は最初の王子ペガサス状

態になっていた。

「だから…こんな所で負ける訳にはいかない…!!!ハアアアアアアアアア!!!」

「な、なぜだっ!!!さっきよりパワーがっ!!!押し負けるだっ!!!この俺がっ!!!」

「これで!!!終わりだ!!!」

「ぐああああああ!!!」

スパーンと体が刀で切られ、バタツ…と倒れるハクビシン。

「さあ！次はお前だ!!ドラゴン!!」

ペガサスのセリフが終わったと同時にハクビシンの命も尽きたのであった。

倒れた僕を回収するため1度ステージが暗くなり、天馬くんが裏まで運んでくれ、ボソリと声をかけてくれた。

「見事な演技だったぞ博、最初のセリフから別人だと思ってしまった。練習とは雰囲気違ったぞ！お前には驚かされてばかりだ！後はファイナーまで休んでくれ」

その言葉で安心感があり、照れくささと涙が出そうになった。

「お疲れ様、水上くん」

「うん」

「ミスはしなかっただろ？」

そう、にこやかに言われたので僕は満足そうに笑顔で「うん！」と答えた。

「さあ、この後は寧々のソロパートだ」

そう、このドラゴンを倒すには歌を歌って寝かせるのだ、そこで寧々さんの独壇場って訳である。

きつと大丈夫だ、寧々さんだっって練習をしてたんだ。

そう考えながらショーの続きを見ることにした。

「…ココは、ワタシにマカセテクダサイ。ウタをウタイマシヨウ」

「—————♪」

『わあ！綺麗な歌ー！』

よしっ!!めちやくちや綺麗な声!!!子供たちもすごく喜んでるよ!!!

「いいぞ！ドラゴンがウトウトしている！」

「……………」

あれ？声が途切れっ……………!?

「動きが……………!?」

「な……………！」

「充電切れ？まさか寧々、あの後もずっと練習を!？」

「まずいよ……………！どうすればっ!!!」

ネーネーが歌わないとドラゴンを眠らせて倒すことはできないっ……………!!!

「ネーネーどうした！お前が先に眠くなってどうする？見ろ、もう少しでドラゴンが眠そうだ！みんな！ネーネーを応援しようじゃないか！」

天馬くんが何とか場を持たせようとするが時間の問題すぎる!!

しかし、僕は何も出来ないでいた。

ただ、今起こってる事を無言で見ることしか出来ない、ただの約立たずでで焦ってるだけのクソだ。

「ネーネーがんばれ！ほんとに……………がんばれ……………!!!」

「う、うわわ！応援が凄くて、ドラゴンがビツクリしちゃってるよー！」

いや……………！鳳さんのスーパープレイでなんとか倒せるかもしれない!!!

「よし、みんなの応援でドラゴンが怯んでいるうちに倒してやる！」

これで一件落着と思ってしまった僕はバカだったのかもしれない。トドメをさそうとした瞬間、ネネロボは天馬くんを潰してしまったのだ。

「うわ……………っ!?ぐええっ!!」

『えっ!?王子がネーネーに潰されちゃったよ!?!』

「わわわーっ!?た、助けなくっちゃー!みんなー!司くんを助けて!」

「……………残念だけど、ここまでだ……………」

「えっ……………?神代くん?」

すると神代くんはマイクを持ち出し……………。

『こうして、ペガサス王子はドラゴン達と仲良くなったのでした。しかし、王子の度は始まったばかり。王子が魔王を倒す日まで、度は続いていくのでした……おしまい』

………終わって………しまった。

「な………っ！」

『え？どうなっちゃったの？ねー今ので終わっちゃったの？………つまんなーい！』

『なんだよ。王子、敵に助けられてるじゃんダッセー』

『なんだかよく分からないショーだったわね……』

『最初は良かったのに急につまらなくなつたなあ。また、他のアトラクションに乗ろうか』

こうして、最初のショーは終わってしまった。

最後はみんな笑顔で終わるショーではあつたはずなのにお客さんは笑顔では無い。

天馬くんは手から血が出そうなほど握りしめて下を向いてしまつている。

鳳さんは『あ………っ』と言いながら困つた表情でお客さんを見ていた。

神代くんは何やら考え事をしていて、寧々さんは泣いているし、僕に至つてはただ座つているだけの無能。

とにかくみんな最悪な状態であつた。